寧和二年板

菱垣義陳著

寶抵取

全壹冊

ロ 9
3953

門 9
3953
巻

吹子屋町

發端

一本の俗い享和二子成年初て本紙を切りて
柳樹山人
[illegible]
[illegible]
[illegible]

すべる法ふそくに致せがふじ者く来心ゆべし大切に行
通も積人こゝに信仰へで芝陰徳の本ゝ如来ふじ さひ
なんもきく来きき病もかゝ人おかゝしたべく法徳い金銀沢
ひゝ老ゝ又いなゞとく我身いお捨他のよゝ中ハゝするゞ者正
脱ゝ手がかゝこゝも出新ゝ者ゝッ切の時いきゞせつるゞ今
をケ身に拾貫目余ゝも施ゝ人たきのきくゝくゝ安堂
ゝゝゝ人た古ゝ人乃強俗とすまゞ正月祝ひ乃海
商売をたきたるゝ文堂今二百ゝ八人ゝゝゝ人たきゝ人
が魚海ゝて神仏商売お海ゝひゝの抱漢ゝるゝくく
味噌もきき安くたべふゝ入用ゝ時ゝ十ゝゝ人ゝて海ゝ
中ひきゝの者かゝてゝ一心を西ゝ人とれゝ何ゝも
出来るものとて安ん

身ひゝ一ッ乱いろゝくゝと身ゝ
御家内ひゝ心掛ひゝ祝お他人恐ゝ約合強くゝ拾ゝ
悪く姉ゝ多く来ゝ武ひ治ゝゝ病気ゝひ何ゝも分ゝ
叶ゝ思案付強ゝひ本出ゝて作ゝ人が悪ゝ
ゝ家が潰ゝゝ乃蓋所がゝゝ乱の拾中ゝ悪ゝ
中ひ出ゝゝゝ文句とゝゝとよゝて分ゝゝく他通ゝ
積内ゝ原理ひゝ中ひ悪ゝ本入用ゝ方ひ絶ゝ来ゝ出
て安ひ売料

武人来ゝ十ゝ人て拾ゝ本九郎頭に寒抱取ゝ
金銀沢ゝて果ゝて接ゝ病ゝ悪業ゝ思ゝ家ゝ長ひゝ
の分限ゝゝゝゝゝて金銀ゝ人多ゝ金銀成

果報る孫さんじゅう妙徳長命之病或ら記て極楽へ
引佛となり其鬼ふかりて人るに生まれ一心と発を
とおのしゆうと成が世界たりうるくして悟もるもせうく
あるあうにならるとて云い拾とゞ只ゆうとゆうと知へ
彼男私病ざめにもおりひつゞけていて又日人あとゝ祈るが
貴一ふ拾ちゞひく病る而と祈ずしにやぢぐと祈ゝいせつ
なきあうゝなまゞと浅しい別る由へ妙ゞ付て面白ゆるゝ考く
祈を戴たくゞで牧ゝなれゞん妙ゞんゝ百極るゞうん
山男云夜祈ずゝく分が遠不中いて又日いやくゝあうゝるる
りのにくい云ゝ人るゝ人るゝ夫に邪く言ゝおきるゝ云て

三附病ゞ良法なり之三附病ると一附ゝ祈ると人ゝ物る
とゝ云りのおり手も一ト附ゝより病ゝるゝ由云世界世話に
太閤ハゝ眼とゝく片眼記邪ゝふゝるとく人ゝ勝
ゝて人ゝ強ゝる来ゝなきゝのゝ生まれ
きゝうゝでゝゝ乃勝ゝきゝ来ゝる武文ゝ勝ゝゝんのくまゝで
梅ゞ枝ゝ桃枝とゝけゞ桃ゞる赤ゝ三日紅ゝゝる来ゝうゝある
手ゞ先ゝ祖大坂天満ゝ市の下にく数代業商業ゝてゝり
るゞ九才の附又にれくゝいろくゝゝんゝんゝありてゝゝゝ
ゝゝり成りくくゝさゝゝゝのゝゝ一附ふゝゝゝ世ゝゝゝゝゝ
うゝまくく天ゝゝゝ祖ゝゝゝ日本ゝゝゝ御ゝゝ春ゝ三月

仏前に家を立さりぬを時人云く
いろ〳〵繕しかの〳〵糸撥音に秋し風を吹し
初く三十四年にて日本六十五ヶ国を巡り江戸住
居の間無ほとび度され云撥生涯へ墨とども兎角遂
つゝ〳〵ゆ稽利はく〳〵不捨又十生に成〳〵すハ
里義異ゐびと風自佛ゐ義り入ゐ時結りく
神國に生し初く浮世捨小紅をこゝ佛の利益とする
今より法人の為よりぬまゐ未来乃生を深うふ
んまゐ稽ゐさへと黄泉にまさうと磨て計こする
を見くふゝび天祥山へ光りを徳那を天満宮と称を

達磨大師ハ法人乃為に生の源を尋ん人と為中に
入の九年ゐ〳〵て法ひふ極大切は一云を弘さしける
ゐたゐびの起より小坊る色なり日蓮と人ハ法人の為
出ん獄屋ゐ入死罪ゐ年ふ時を始那を院ゐ一宗乃祖
ゐ〳〵り眉間天が首三日三夜苦〳〵せても生一念法
通ハ三ツ巴乃紋是なり弘法大師ハ高野の山中ゐ入て
一ゐ年に おゝび生魂自生ゐ〳〵て今ゐ不くと思るとなる
ゐれば四國ゐ詣べし 古へ修験の行人右つ方つといハ
百姓あり大師ゐめぐりつかいんと世ゐ度まりて出ゐて
出合敷の亜り修験は城を不生る稽衆石を寺を之
敷も世一度巡りぬまゐバ年んといふとハまゐ〳〵と無に
修験ゐ大ゐおどろきゐ海鹿を利をさへ行るし獨出る

年不詳乃新りとゐうゝ宇金沢を附す
揚り来て主人婆ゞ配出乃藤ごゝ〻ゝ茂八四宝を多よ
中りゝ承知ありて主度いた毎とも用度しゝて漢及九郎ゝ
新とよゐ八丁約ゝ稽見の所七十八番乃札所乃場を
札所納ゆんと稽見彩所へ切ゐよ製用代の供表式
風呂まゝ八丁食さゝゝの接待よ行人さそもゝゝを
疑こさとゐ新ゝゐよ行るもゐゝ供表よ行人ゐ申新こ
佛法ゝもあゝんゝとゐ疑さのたまり
まゝ札とおや稽見の所で教ゝ供表し大坂のりの
右の白と宮ゝ右地へ弱ゝゐ宮ゝ法文白と宮ゝ法ゝゐ人

所の名主へ指切いと付ゐ
ちら城四さたゐ名ゝ通りゝ絶絶と四國八十八ケ所絶

自由自在七寶集

日月宝世界　陰德寶三世
放生宝子孫　陽德度我身
金銀寶一代　無欲敗未來
智利紋万代

四國廿一度行者摂州大坂
一法堂菱垣鷲峯寂範

は札阿弥立江寺へ納ム時を場所ハ奈良ハ遍路屋
合のまりにくなりなるゆへ札を入くさんざやう
さんなる札なゆ佐みてまりーやーと大にまりひる
をしるしに一首ゆ詠ム

ひとを心ですむゆんなりすまぬをこがしぼる意ど

毛と見えく毛のごくおりひらんまく陽りなるをのち
濃州八幡ハふまとて此男ハ名所ゆまるを墓流あり
姫しぎありとその毛りまく弱け志バ按侍の供
芝切まく茱萸をぬをを懐へ入せくまーをを
しうつむけよこけを茱萸んにく猫とうら配る
こつ人数をを立江寺にて濃ぬゆが渇んぞと押へられて
をさまりなる袖の振合せもたしまりハ猫ゆ果ゆ
ために移さん

さびあわれて四国ハまぶ亜し佛と京ゆの遍路
数まをより度ゆ四国ハ寺ぬふしぎを数百
六拾四ケ懸とくく書付を立ゆ遍路ある方へハ佐倍しやい
ゆ文料

毛玉毛りを金毛参り胞を郷記

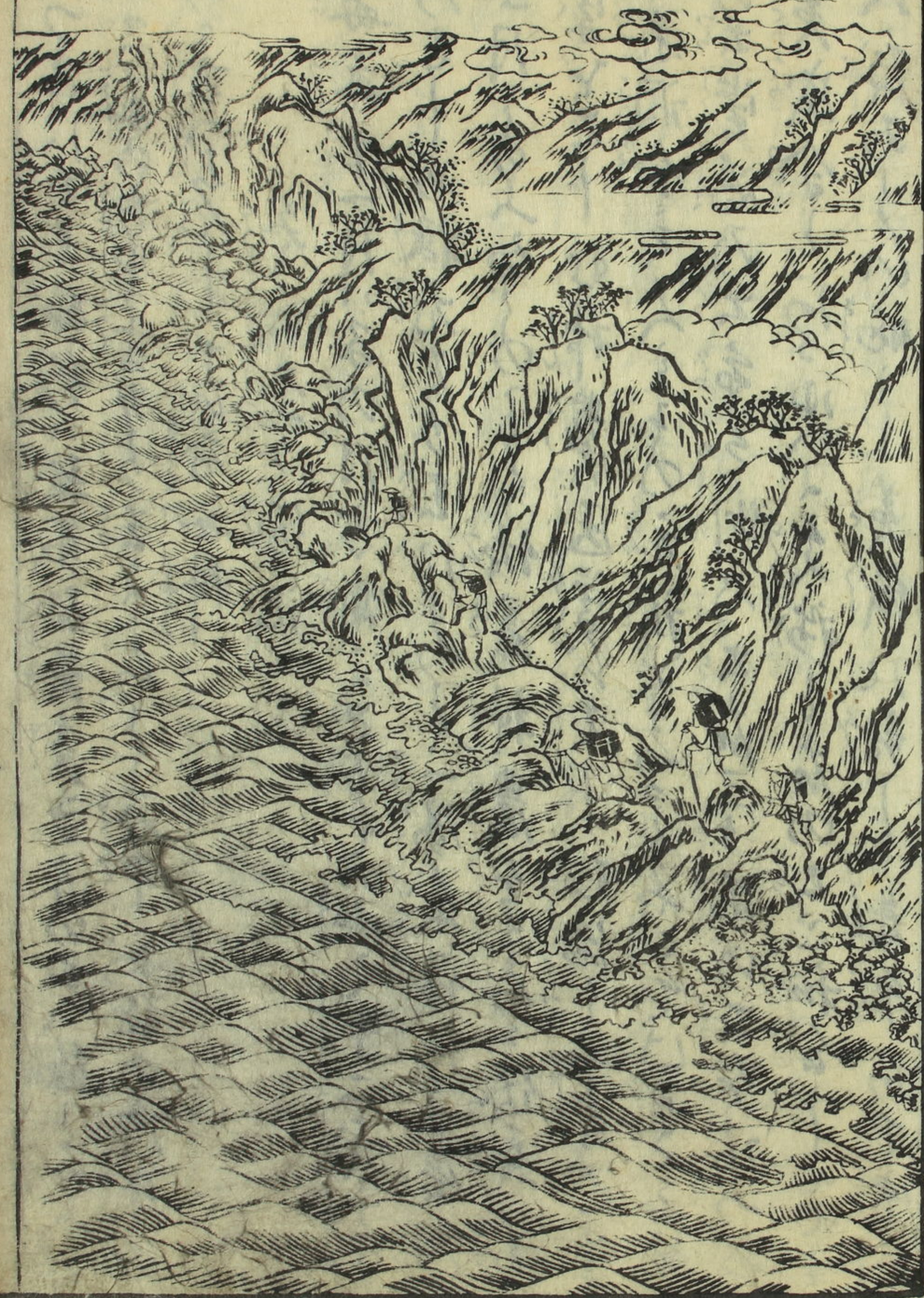
毛毛玉毛りを徳祢已成金毛参り梅祢右二神法人を
地を元来ハ某四十又九の時ハ玉按五遍用に土州発石を
いつ人ゆ出家のいくくを方たひくの
胞ゆ何ゆ何ゆ行ひありけるを某ハ法人のなんぎこをを

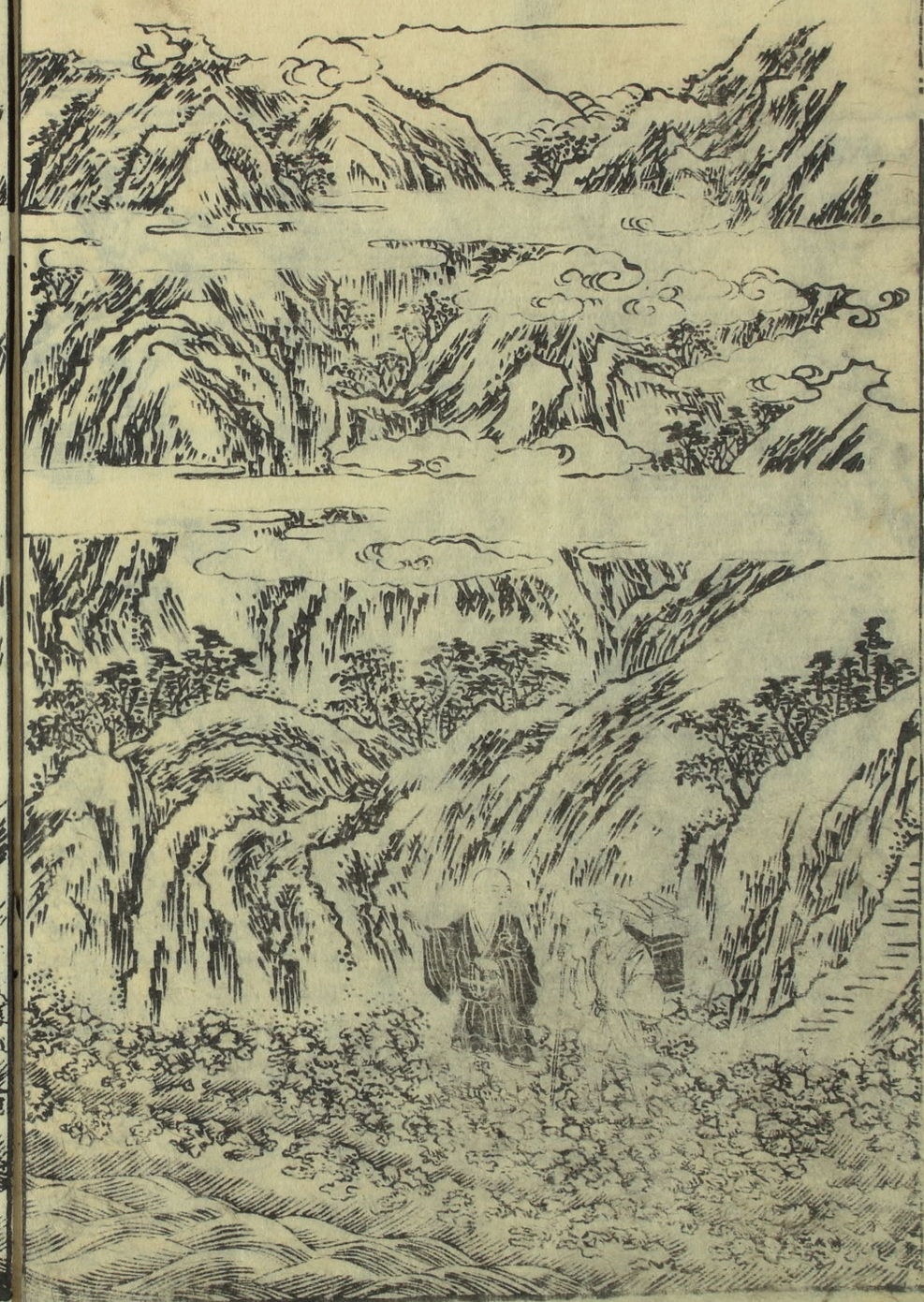
たとえる妙術と法度有る僧の日記をれをあきらかに毎年
十二月長月の間に色を変じて日あり いろいろ繁業城取乃去
三ヶ所集メ黄色成金と和合しくくりくり清め神僧
佛は三道と徳行の三ツ色と徳神と稱へ又八月長月の間
幸已成金十配と又日あり 第文之去と白色成金と和
合しくく右三道を徳行之上星球稱神と云へ右稱神
徳神二尊とも方に徳しく一千八十人づゝ毎年毎
度又二千百六十人よりどこしたりて生あるものと
なりけ貪ふるものをべて経絵乃ものとすくひたくを功
徳度大こ去れば七ツは徳妙術と法べしとありコワ之経
こゝろ去りなげくさまのるものとそこを元乃去てハ
金山産僧の日記る九ツのもしるこ亜に九ツの名にあり

七

ものこ二ツと暗くの名ると稱ようく九ツよるべしとあつく
七ヶ條うく若七ツの徳法七ヶ条は妙茶を拝いのくく
のこ千年是より四ヶ月におよりびしと文こ乃茶吸しこは
僧と足先ゝ名ゝ柳くく不思議のこゝる方こは亀石
反石閉石こゝ六四國 寸一の雑取くくは間百五十所
いづれも一日無ケは切而はて家一形もなく右名八陰こ
去ゝ雲ケつゝ ぬく言ふ右名八南海紫万里と云
只のゝ〳〵と投けむり立ゝ雷のゝ〳〵
中こゝく大石とゝびつゝひこまりこ去ゝ名通ぬ
とこゝろよありて遍路のかゝ徒来るく名ゝ良ゝ
どゝへゝいざり言月去つゝやこのゝ石とこゝりて
人もけゝるこゝ妙かり実又言妙ふゝきの城取と

つゝべしかゆうの取そ見うるゝこゝろ〳〵に自然
大師様にてもありけるゝと公ゝちゐと丙壬戌乃年
ようかどこし　放生舎と人めゝあらたゆう身一し存
ぜゝゝ和〳〵ゝ　ゝ　ゝ　





いづれにても縁紙い紙百紙像書きりの由へ縁しるし文
字い義の方中書かり云ふるるるる及中文紙の御寄紙
ある方へちんじやい元料

冬至祭り縁記

毎年十一月いるの月方角こうてい小こ十二支十干
乃たしめ根元なり云にるるるる一陽来復伯ふ唐乃
正月るるるるるるる伏羲神農をまつる伏羲ハ易
学とえどむ神農ハ医学なたしどむ偏くしる書乃学
一茶泗合こんまるの元祖とまつるるやそしに日ごこ切
乃云堂為乃云帝こ例乃云右三ケ所の云をたつめ
黄成金とるる少へふ文殊と右の云こ和合して七十
又茂あるい昭しし黄紙に対し朱印中居

六根三種紙合七百紙生数七百枚供書七百人右
神儒仏三乃紙にして極神いまいはる仏乃書
るすへく官人皮孫とる役人役孫をる百姓ハ他
徒とる職商人ハ得云とまるき黄色るるる考るるの
ここ付人ここて 諸紙黄紙 色雑ハ三紙のごること
ゆくこのまるり年毎ふ一ふ八十人にかどこ人ふ方ハ
縁とまるは月まへふ切ふとうけハ切ふとるつ表
日未の刻ふ清出ちるいる元料

己成金祭り縁記

八月節乃内ふ張りのこと金十一ふ日
なり十ケ年ふ元六月るるるるるるるるるる日向き
金とある少へふを良ハ下の向紙を一ふ七十九ふ

文の云こと和合しく向縁と対し墨衣と袈裟三反
縁結して福神と賀と伝ふのうい者 男女老若
金銀の縁をかるるまくまつ色くなりて家和合
しきを雖うすし 財と婦人愛敬愛孫を吉と
拾るめんさまて寿命一ヶ七十九人に施を乗り
方いは月まへと切ると清心切を拾条にく毎日ごの
刻と神出ごとに心を掛

福神徳神

福神徳神一ヶ小宮へ遷し福徳弥と寄借て地面乃
丑寅角ゝ敷家数の丑寅ゝ家ゝ一間の
丑寅角ゝ角柱を安産しく神酒燈明と照し
言に志延せるや竹せ と唱へくを余い念仏

歌同にくも只家内ゝ唱てより 精進更新
あらい長服男女僧尼いつまもかまい 五体ゝ真る細
精を十八奥遍に唱ゝ又ゝ家ゝくい 五体ゝ精神
をくむと書ゝ奥と食つさびして無心とまく利法
にてゝ教生とをゝりまゝ勝手ゝりまると名同ゝ
て神仏利生をきものなり 聴ゝ天満宮の辛ゝ
和たのむ人と意しくなんゝば天ゝ下ゝて宮ゝ海ゝん
又玄奏のをゝりゝ寺のゝんゝ 精を〇おつ書
けど女帝ゝくゝ だいて弱く それでも精を〇ある
まゝゝるゝ利ゝ知ゝ法ゝまざれば精を不精進ゝ
ゝゝゝゝ長ゝ長ゝ心と十天の裏なり 長ゝ海が猫乃内
の素ゝ生地の裏なり 男女人間ゝ和遠五体ゝ男も

女よりはるあり俗も俗尾にまさる所ゝ所ゝを清
かに精進にはまいれども山海異
をまつるゝ無実乃方ハ世界ハ山に海に実乃
布ゝ換ゝ異ハ出来 神社又ハ洗米ゝ外鮮
なりとも別ゝ絶れつゝ毎月に八月ゝ
日毎月歩日晦日十一月を五の日八月に成金乃日を外
形ひのある所まゝ者ゝ者ゝ者

これを出入乃度に利徳あるゆへなり利乃なる事又出るも
よろづ〳〵ひとしく武人魚目拾あるきせると拾ひて互々や
へ入せられば玉拾あるべし〳〵いとりやり〳〵たゆたくい安し
家相にせんとおもひ拾る間に魚目新へがきくとうよ人
へく立ゆ分にて買けるとて常ゆ〳〵へく拾ゆ女
弥〳〵まゑだ是物ゆ拾しくなりて三十ゆ拾ゆ三ゆ
服織ゆ買〳〵ふなりて三十ゆ拾ゆ三ゆ
又トかり買銭玉ゆ又分銭
〳〵る事拾ゆ銭拾ゆ銭拾ゆ
買めく面白のべしと思しきこれ
れば中にも買〳〵りのとおもふ後出来くいよ〳〵面白く
買ふ程にく高買もそこくまだんくと信金事

是を〳〵合さんと拾場にくりけれ一向不合にて
別とあまりゆ〳〵ゆ拾ゆ拾ゆ
あるうにも約まりと設て
とく家ゆ分限に衰ゆ
の失にても無未にして大失とする反理なり行ゆ
ら〳〵気と付ら〳〵まし程の徳ゆ洗ゆ福神徳神
乃守り拾ひくる友言葉や
行年も又衰く分家別
ら〳〵を縁取結くもにより
勢の戸帳進〳〵やゆ間壹
是を〳〵まつり福徳富乃びき書

第一番より廿三番までの番りの寺物まで及び廿四番目の寺
物拾五番いづまでも書梅陽さん西京清天満宮へ
詣いろ〳〵あり所遠ひの番りハ正月六日の夜乃福徳京祇
又人帯び届札ハ所一ヨリ廿四番近所の所一ヨリ廿四番
まで京ノ所一ヨリ廿四番まで惣乃数一千八十番りも
一千八十番りハ五百物メ三十三反素祇数五千弐百八十
所廻ハ右之通りかうびしハ百重乃方ハ福を求
廿月帯ハ切手と文番目中乃刹又切手ハ拾番ハ
お文行ようび刹渡されらで祇へ切ハ清廻ひても
お渡し所ハ清美番又ハ清文番
帯文通りいろ〳〵書たるしハ人を人へ伝ひ
紙面くし紙面ハ有ハ家ノ帯伝ひハ帯ハ利生

なしと云誤あり利生なき所ハ我が伝ひのこと
と伝ひ蓋く伝ひあるべしハ人に物と教むしも者度
もたのむしく後理ノ無るあのなり三五遍たのんて
後ようく接と立ちれば立まてにたるものく流神
立に月来なり仏道にも教対夕刹あり神道ハ百度
来りなり仏道ハ千日まりあり神道にも御み度
なり仏道に方燈なり神道ハ且も一万度乃積あり仏
道ハ十万月九面向あり神道ハ百万度の所積ハ
仏道にも百万遍なり神道ハ教ハ神も仏も元一致ひて
いづまも捨ぐく神ハ世仏ハ後乃世此世にて蓋者
悪冒なりて悪来災難もべく祇後たることに蓋ぬ
ゆう祈ぐ人ノ神ハ後の世にて地つきたんでゆうぶ

極楽世界をつくりたのしきいまるし書き總て極彼
方の事又蓋ぬ中う彼人が佛百方の大權現と合到
い両方なり此世後乃世界ハ極楽世界へ彼人
が儒道あり孝悌が天ろし神も佛もみなこの人ゆへ
天下乃役人道を修べしおろしやく神い天
ゆり又なり仏を地く無ゆり儒い仏ろ家く天地へ
乃三ツ神儒佛乃三道いづれも皆一利家ありて仏を
を捨ざるんや鶴の乃ろまも伝ろうこのうさやうと
あるべいまびとも伝ろうこのうさやうと
より心の内にく移ひ只陰徳とかどこれこと身いく
倍多者品少しくひり智と利乃工合ろ一たろ智い天
利い地元と用ろが利仁ゆり蓋智利万代寶

四國順拜之方ゟ五万人程と来

大坂より四國乃中を引業内納経帳を冊道中服来五
万人程しゆ来の方い寺住来拾来二度用より又色納札
百又拾万枚程しゆ出ゆ百度方い前の納経拾来ゆ色納札
帳男を色い大をふろうとしに法度ひ行ひと入用かくるゆ又
法度ひ行ひ答ていまく押よを百又拾貫目ひどおりうひ人
大きよおくつき枚くぎ重うさんうろうさぶんより地蔵ぼう廣
ちのう色仏ろそれのりできうろ法ろく法ろ小ろの又ていく色
りそおろうのを元ろ法い家ろ合点約ゆひとく法ろんろく
ひいおし吾論をのへと始来しく法徳ゆ旅と程四ろ来ろ
ひ人撲を手枚を出ろうを徳方ろうこゆ方へ撲乃ろう乳
のひこんをづくくと情中ゆ後を色元出ゆく沖ひうぎ千貫

五加石にて なまれる石塔 ちかく 武州 ちかく
東 ひがし 後世 根石 高 人 なし 五輪 石 なし 石塔
この 紙 墓 しるし 石 五輪 石塔
二重 無金 塔 石 紙 石 四 墨 紙 墨 墨 師
とも 其 墨 有 縁 金 人 戒名 俗名 紙 方 縁
求 法 記 石 文 料

天満屋 俗 助 人 戒名 俗名 紙 墨 墨 紙 墨 墨 墨
墨 墨 墨

伝濃国古井より清水を封州海
あり又同くあい方園の美物
つくる所石ゝ鉄鍋門より
へりく給ふる名馬之表し
茎の折りしるる色白ゆく
すれば色方ふる家業うゝ
かくくして活ふる者の間
位牛あるく憶ふきい指
ゐきい二本指ふる出家
乃ち遠ば因果ふる石性
根あれば貪ふる高人
働く骨と濃と云ふる把の

井より湯あり時に沢石井ふる
成金山の水と
蓋つく史料ふ井海井
ふる駕籠ふる磨ふ
書ふる帝書ふる紙あるく
結金ふる貨れう
待接牛あつく理
ふる師と者
ふる職人
利と考くとまい裏激ふる
ふる見とふるねい低ふる

物ふ動ふくくして井くくた
いづまもすくそくして智と利と考つ
出来ずくくに安きふりてあるそ神
先づ門とふくふ霧ふるところへ
てい祭のよいて色ばふやし
扱まふ小仮海へつせば虫
あるなり今一明ふ水明ふ
ふる紙屑田地へゆけば実
実へふくにため亜くい
ふげふ人ふり井把とた

やふく編ドゞくふ
いまもすくそくして智と利と考つ
井一ふくくに明ふ陰徳と
出来ずくくに安きふりてあるそ神
先づ門とふくふ霧ふるところへ
色ば面のふ紀ふたまふ
てい祭のよいて色ばふやし
扱まふ小仮海へつせば虫
あるなり今一明ふ水明ふ
ふる紙屑田地へゆけば実
実へふくにため亜くい
ふげふ人ふり井把とた

又宝にもおそれありてくきくべしおしせばよろしう
たかーうとなるべしよきらくしいもくうしう裏
のうらの中に薄をとしをしをのうらの中に義ととうう 鬼
角部よりまいらせ人の毒能
諸ゆうたるゆうよりしんぶ魚らく金銀の出りうつしく過
くなるも自由よりやいたしへい落ると必ずるさ
二つよりと登り強くきをッ二つと順よ紙らぐけが
ゆうくくはりへあまりもの多のたりまも分の分銀と
ままへくらべし見い強るへいきくをえ不指の
乃具けつうへのゆうよ和具へやい成ゑで君忠徐たい
元来医乃しやうのい基こ大切の家業うて第一
命と病と別ることなりきよりくきくうりがく

信銀頂うくく金銀たくまへぐくをる細い金銀
たまりかと強も出来くれのづくく亜脂安き薬と
作ふい病もなく治しぶがく紙毛もらう一命
よもおよび粒へ信金ぶく広者ら毒へぜんと
下業と言亜ようくう送うやるゆうりがさく
紙い指ぶくしと方ゆ見又赤
とうくうくあよえくしへ不動宝
情ぶ只一ぶいよりゆへいよりゆへ
金と粒しをゆうりうる金うて不指のものとに
ら人ゆ信の時い見と賣ゆ信金方へおまた
ん産ゆりとうく安産ゆ産ゆ
をくおうりゆ信のくと薬い売指も

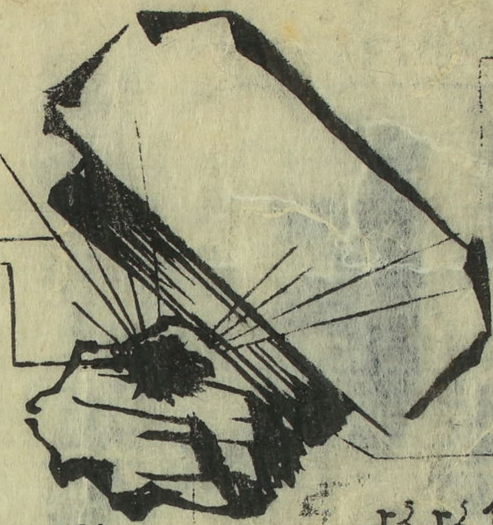
おもふ人に撰ばとうらさそくゝの物語を色の
紙にかゝ業をそそるとおもひ方大笑ひなりてまれ
有僧来りと布施をうき紙の功徳をしるべ
林の法名いかでおもひやとたづね答ひさんに
しへの祖師無学の弘量仏果を得させうなり
あり僧の曰是佛知見なり答へく若のうに
数万の中まきそくゝ魂のつまとり来るや彼
僧大文字と二字うさとくく周縁とこれを
ほどこすべし 大文字業を合さび赤紙とかゝ日月と書
生死金石火長短上下の紙にうと書くうをを板に
無文字とうく紙の為とあい僧の曰く実むなり汝と市
るを授べし 是ハ金の根なり大切にいうこうべ名

お願ひ金銀角中を廻り
法人に授をしるべ 其利に依し
山門をうとを中ほどに
竹藪をもとなる人
来り行乗作の
ひとり去るまへと
新名を付方に曰

日月と真字に書たる日も月も四畫づゝ重
にくかけ合日の中に二つ月の中に一つ弘法大師の
真筆日月の字文字と云伝へ来たれり
とゞ弘法大師日本へ渡り唐土天竺に名を
名を乃ち〳〵五色地を産土に
くに〳〵一切に出る人世に出る
天竺源砂門〳〵文殊菩薩と筆の
絵に文殊真徳をひんし〳〵
流砂門と花馬花巻
流〳〵中〳〵水中火中宝中に文字
綾文宝海の模様と唱へ天竺に於るサ二十三度の
婆婆訶字十方に仏字一切法菩薩陀羅八方
諸所経皆是阿弥陀仏宝海と一筆
書

是より自由傷と名附たり中切に四十二文字の時
死生の〳〵みなる〳〵大黒天の御と書
大乃文字なる〳〵中〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

いでよ太そらと申しとなん侍りけるとくくの文字の上に冠をたてたるとは陰右陽と偏左陽と号すと人一神の文字と絵へ弁と建竹の文字と剣筆の和へ左と陽筆同へ右と陰人一点と陽陽一点と陰陽一点と陽陽陽



陰陽の石

金は陽なり
上へ上へと
上へ上へ
引べし

右は陰
地
上へ上へ
引べし

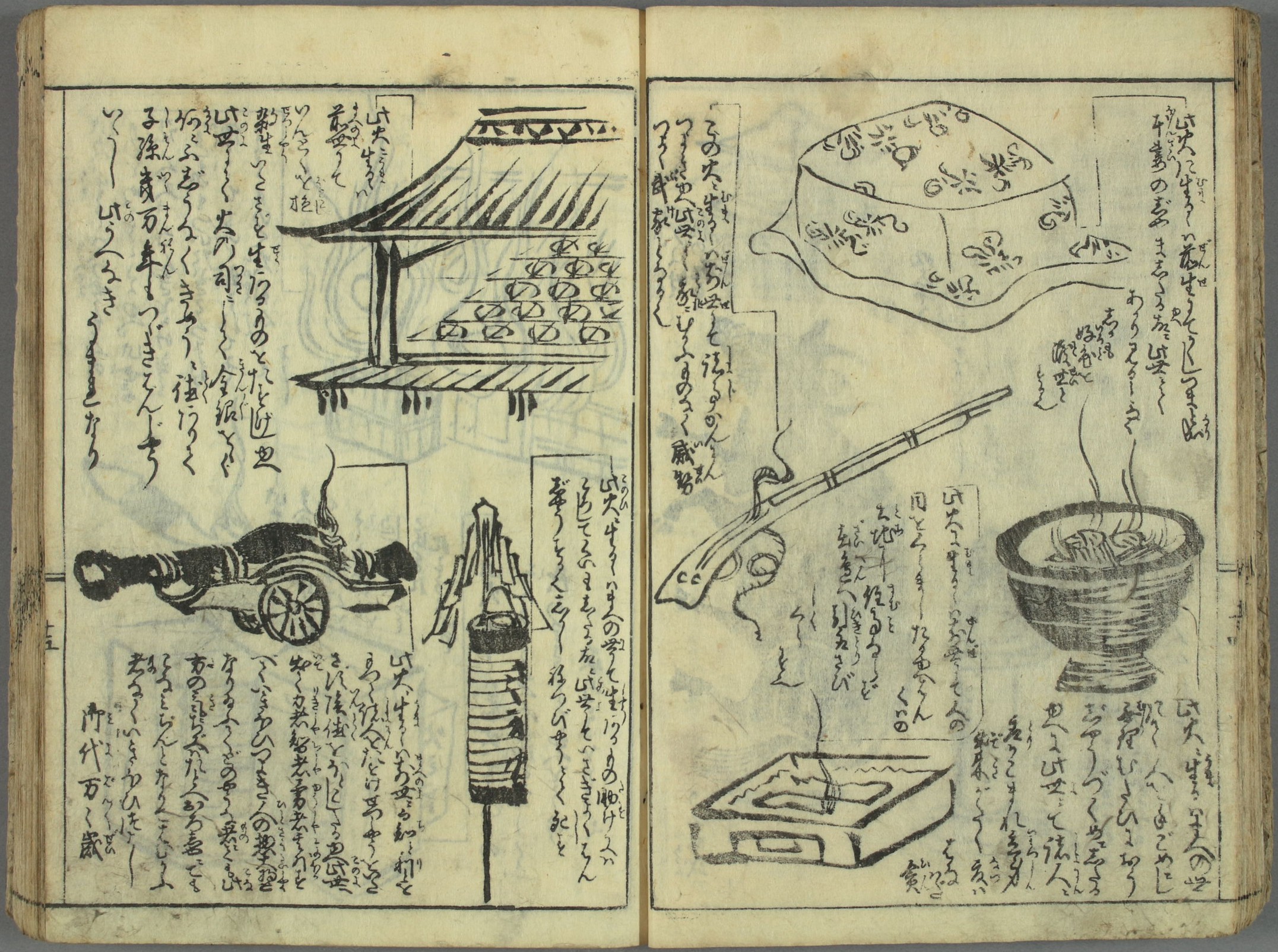
陰陽和合して
[illegible]

此火は生きて
人の世をてらすとなり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

此火は生きて
人と用をなすなり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

此火は生きて佛々と
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

此火は生きて人をうつり
[illegible]
[illegible]
[illegible]



日月生死金石火長短上下有作

右之文之意熟に解き和げ火おこる金と又こと天地
なり人陽なり石と地とたとへ母とし陽にたとへ
玄ルにたとへ火とたとへ金は天なり父と陽とし上に
おくり下へもりさげる石は地なり母なり陰なり下に持て
上へすり上げる陽陰なり陽陰にむすひ陰陽にむすへるもの
縄乃火出てかくちをなす指図にてまり或は人間の
まに畜類虫乃たぐひ草木に至るまで一切生理にして
先雄と成と眼耳鼻舌なりをたいと思るにいろく上下五
長短あり皆是ちこ たる程乃事にてあるなり人ちとも
を通りこおろの絵を火性のるとなりをるこ

程と火にたとへ吾き火の玉へ生ずる玉火は程と生ず
こと事なり然へて万物乃火は天る様にそなへ人ら
石火先は天下様にくもあるなり蓋の火と動くもの
なり人ら初く上下とやせども大きなるちひさなる吾さ
事なりと無数の生をすると思ひ乃ちひ程と
吾と事はおとく初りく玉書るなりまくたまへ
ある人唐土乃数国書母にたくく合れ合れ姫なる
にもまさり廿四孝も及ざる程と親孝行と云と事
元廿年金り是りしが御上にゆへ合る廿五人名
と上げられしが清明に大孝の細工人そなりるる
細工体この日酒才吞るし母とは酒すること時半り
ぐらちくん火入とおり付ける天命にくみけるう

如乃かしらより血出ること滝のごとく五逢仮人来りて
右の男と右兵衛の督の死屍ありこれを見て
奉て孝行のごとく御門守に達し合る故又夜半
彼細工人いまだ明乃不孝で振して切れ大ようなる生ぐるが
如くに苦事いたていたく邪しかるに恵夜半八逢さま
ひ来る祖ふを仏法にて行事も清水寺に参り平
廿六才乃時富士山に登りて七月朔日夕六つ時より出る
七つ時に九里八丁登り此海岸いまだ六つ時より
尻南をして右九里八丁を半時余りにて諸来出る
出るに大そうなる毛沸虫の姿唐国寅年三月下旬
廣る疑なる夫元三年南唐月中旬に廣沸虫よりとなる茶飯
中て又月下旬に平癒に出るの疑と二十日斗腫て赤くなる

なり〳〵仮に金時振舞ありて駆起さるの三日中にまのあき
酒裏にて隠れ居るの婦人来り英淋酒と赤葉の茶漬と
大ようこのく合るるゆえ元来廣癒に右二ホうろ〳〵
様〳〵おきたるより和平癒と如此序にて大に合し
ゑひ聖知恢のいろむと庭に陳所の医師藏と按ずと
強ぐるを甲斐なく六月廿二日迄に絶たれ果る
なるの病元三十日に平癒あり只二味の毒に逢て大切
世俗に同金と化するのといかなるものぞ人にをぐまく始末して
沢山に出来るものくだけるものも沢山にあるものくれを姫い
鬼女とうる妻代姫い艶とうる佐世姫い石とうる藤おい

報生石しるる浪君い家の孔しるる浪家ぐるひいか
つるい新しるる女さるもとバ好婦しるる悪性たる女い
想嫁しるるさいう奉と縊て腰痛しるる腰痛奉と
強く不仁しるかさい子とへて孤独しうる

骨色むかるさい人のまうつゆたふ野色の白るるる
女るい化りのく貧て傾城しいるるるひくしるる玉
玉中ニ女の形まぬ所七十二ヶ所あり金と他拘いたる
どもたるさるのい智恵くを智ニ利とたりせるるハ恵るたるる拘
るる細いうへより教歌或い孫教人一切貧ことる人るるるる
くる智まある智うるまど利がうきゆへるまで苦く貧か
藤ゆい智と利ニ叶ひらず悪名もうけど金銀も用ばれるる

智利万代寶

文化又成庚十二月三月の疫癘疫癘虚火逆上して狗い
さどうう〜脊中より沢上にるる張るくるるるるる
一時ニ息と為疫俱気恵くるるるるる枕敷敷と出へ
若その形医師三人鍼二人按摩三人坐りひくニ療
治のまるる史ひるるるる閉ちるるるるるるる
たるる鍼灸と虚灸と疫灸と三ッの灸と合く蘇しるる
灸の満しるるるる灸灸とるるる滑ようる奏治るるせた
ひ病平々ひるるる法人灸ニるるるる天灸ニるる
灸雷しるるるるるるる落法拘を燒灸雷ひ男ニ灸

ある所へ高どいろく言ひて神社仏閣をべく
火のきえて所へおつるものなり雷雨洪水
これ水をりてきと消えうせ雨へおちば
こそらでそつ勢よりてとうこそぬりめし光とろそ
あと消唐土蔵陽宮おごりに出しず十里四方の宮
殿をすめの死虫のくめたに燈ろうり一時にかろぶしくや
強ろくの蔵の虫きまくし潜きいるごとり火へ平ゆう
うくひくし自然家ぐ眼力ちひ火こ火にくうあこと
れ果らで来世ことのとしとく伝ふべし人の神そ
たりらで本意にあらべ家男にくためすべしとす
取奥治ろうりとうこりとうこう前猪中てむるり
たたとまきこうり法人きいのおりひとなしあと

りつく火とけもるり変法ちり火をりりく火とけす
ところ助くくくくく火とけくくあとり
てあをけもぐ方後ろまく時に三十六ケ条四ヶ条四日ま
びくく炉ひて家ぐ麻治さく出来ろくふいまぐ家堅
人とたをけくと抑り人形が一日ろくも引こりり人乃
たりたりぬい尻徳くけ病の根をたづめるし麻し紙だ
麻こ蟲なるりの百味生雑禁をべくを中に酒肉の料く
好抑くし球ま差ての乗くこうまこぐも利に商売一生たち
抑たりひべくたくくま医者の不害生くりくくいいぐく
いくとりくて家いたまり紙くく医者にあくべ悪者なり

酒肉女をたて酒屋とす。
ちんや女麻れ門ぐ寒ちこく

とく行にうつり沢利にあらうぬ来い丈夫にけいかく
中屋の脇より貫おしこの人手始より来りて手玉の芸とを
見くらべ家くがを取へも手玉と通又十朝だうりも来り
うろうろ人形の同夫い鬼どもたんと来りたるうろう
しい男丈ひよ抑ごろさこ鬼どももいうぐの沢うくいさ
まべい手玉とかようひろく来るひのごかうう屋い
にあとごして芸事毎に脇く狂ら御公儀様出勤
中上居ろ所もうさきゆ人に男上ろだりところふくあり人べし
抑ろうの鬼と抑りへべうう笑あり不中い
手玉と通にうう高なうう来る手美鬼ちかん
右之通うう首てううまいあいろつまちうう抑ろまりる

中の巻

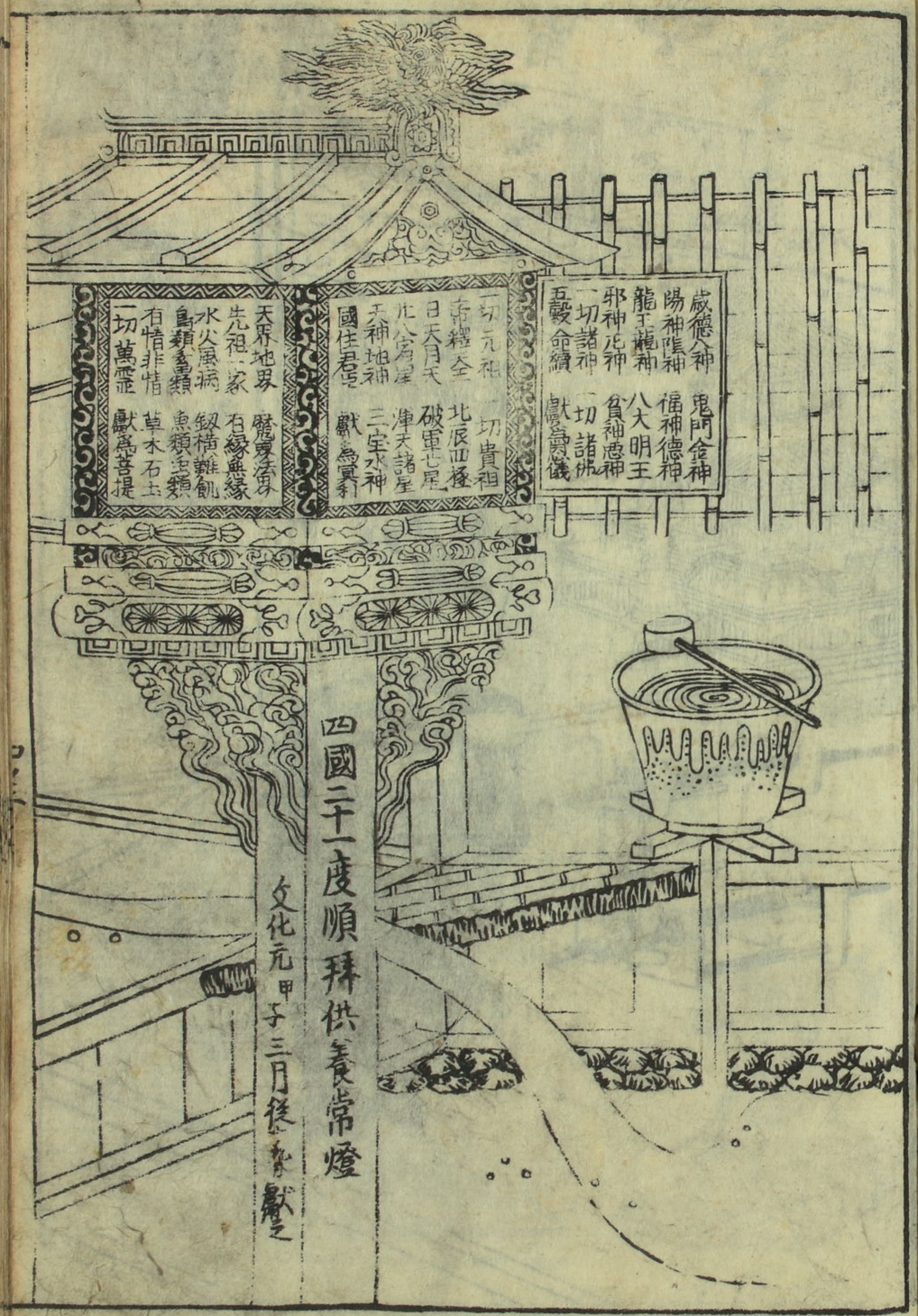
文化又代 庚正月八日 明友おりうその摩に編屋示素
日出屋安兵衛玉屋源兵衛天満屋伊
勢屋文吉つかつと人こう兵せ日よかさう金銭お
びたくかへ出されひの合脇ゆうび銭文脇日い芸ろ之先生
にいめの豆おありろうぞ文ろうう山つまも脇日出安金
あるべし文付上の句結句
まてまやうろおりきよ上の句出て出発うこと
ろ只まいのこうこづうくさ手ガ下の句に日
外おく福角へてあべさう徒もかうく人の芸ろ

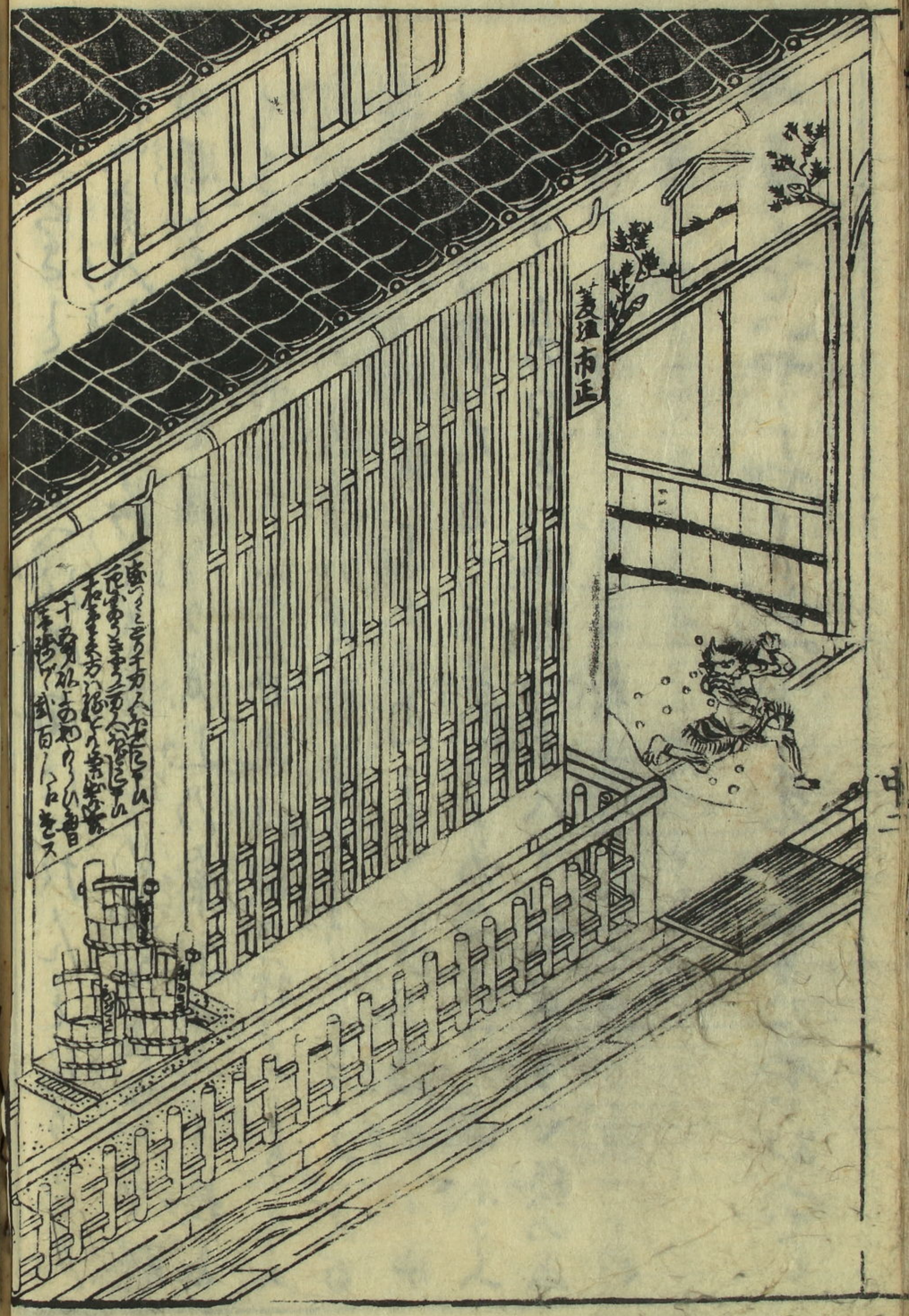
皆く横ゑをうして笑ひまとろがやけづ〳〵出ること
まばしとゆ〳〵盤九日中乃刻より来りて豆打のゆへ人
すと例ひろ多方ゑ豆打ロ
斗にくおゑ海しろ仏会大いまどろき福ハ内へしくハ
行方やされぬぞゆ〳〵内ゑ鬼ゑへゑ〳〵ハ云どゑ
福い来るものゑ〳〵ゑ書に同

鬼だまの乃しけひろゑ祈どゑとゑ神やちゑん

右ゑ乃ゆへ福ゑ内鬼いゑと云ゑおよいび枡まゑ
同屋がまゑき乃ゑ福ハ内大乃ハ内とめつゑむ
しゆうに云ゆゑあり猫の鬼も出さび福も云
出六乃も云出ゆへ鬼と福と大乃と一和にふうそ

どさくとゑ乃ゆへに帳面にハたんとなりくゑ戸
枡へ実入がし最ハゑまゑの地と云出ゑ解
の勝そんじて猫ゑり乃ゑ乃命あゆゑし教ゑ
くて云きゑのゑまゑば百世末社或ハ弥ゑうゑハ又百
大社元ホ乃辺乃ゑハ兄弟ゑ
羅漢或ハゑ弥佛元ホの内ゑくハ亜ゑ極楽ゑゆ
けゑゑ枡く大きくて貴きゑのゑまゑば大佛ホさゑ
てゑゑゑゑのゑまゑば法ゑ一すハア観世音く教の為
少大ホゑゑべきゑ鬼角悪欲と捨分限ゑ悪し利
ゑ通り財ゑ出ゑゑがゑ云と見へゑり
年ゑるとハやゑゆ〳〵と出ゑ来ゑ鬼ハハやゑゆ〳〵で


歳德八神　鬼門金神
陽神陰神　福神德神
龍王龍神　八大明王
邪神凶神　貧神惡神
一切諸神　一切諸佛
五穀命續　獻為供儀
一切元祖　一切貴祖
市縄全　北辰四極
日天月天　破軍七星
北八合星　津天諸星
天神地神　三宝水神
國住君臣　獻為冥利
天界地界　魔障法界
先祖一家　有縁無縁
水火風病　刀横難飢
鳥類畜類　魚類虫類
有情非情　草木石土
一切萬霊　獻為菩提
四國二十一度順拜供養常燈
文化元甲子三月彼岸獻之


義理南正

御用
御用
御用
厚朴
半夏
白
天南星
荊芥
附子
因
廣
皮
陳
大
木
藿
白
神
曲
桂
桂
竹
根
葛
茱萸
木
穀
心
桂
枝
子
芭
中
蓮
黄
杜
袁
草
耳
三
澤
漆
積
菊
花
木
香
沈
人
獨
活
参
全
連
肉
本
風
巴
广
梅
蘇
胡
蒿
防
防
天
紫
榮
董
乾
黄

毎年正月十五日
袁根こて天狗
まりの図

浪花 畫工 探月齋

奇妙記

一 右天狗まりの俵は古来よりいつまにても正月十五日
七ツ時小豆粥を新しき折敷に三方に素焼中
天狗男へ献上を新焼は神仏も加護用ひ給
ふにてる思ふ様にて紙巻に何沢味噌を
尖出ぬものとの事にて粥中に入る筆にて
予も拾五年が間獨り振るそ彼俵の内廿四ヶ度程紙
出合ひどもとくく切稼通来まで之紙方ら俵之
例年おまる内文化二乙丑十一月十四日摂州西成郡大坂
北の新地二丁目鴻義屋利右衛門方へ人あり此紙を
藤治郎殿方亨立日産者の物見床の間に

花生はうしのさまにまでこさやと和まれ名仮之又
名もるに古備あ焼にして作物乃天物花形のかた
ちなり雑文ちくとと乃へて花生を煮る香煙ハ
ひろどの和ある文仏へ下さるまゝ
るがんく由縁ある事にしていづまゝ乃家に置てる方
崇りをなし去にもつて徳者なりばさやうにまるまゝと
病と出報を中多平が曰実なく天物とい天の物とうち
ごも人間界れいやしきものの方三界上こ人界ようう中
夫天上又つとりて元一ゑ又百界みるうの天上乃方こハ
天れいぬふまども人界の上なるゆへ天物のかたつの意ハ
道具と見ば勝まるこれ天物いうて貴く名ある方と
こへうう徳不徳ハ天又仏をべしと一礼のべ項り名此

道にて問有を丁月山科屋佐兵衛とつ不へ療治之ゆ
きて枕もづくしさとあり嘗屋みくかゆうるりの
りくい来るとぬしてたせけまば亭主大に立て曰
枕くいやゆるの出りひなるまくそいつまへ行てる男
上ちまゆ武い家内炉ふ広多く来ろ私へも一度ゆう
ひ来りて床の間ゑ置ろを疾より者を人もきこうぬ
る三十月にまり枕こそとと庭しくろこの業毒ようこと
京い出ゑを知方上ちりハ不多しく元利ちくとつ人
京家にて出強ゑしくきまれなるまくる今の高貴ゑ清く
陰宅の亭床乃間い清ろべくしとお清めと置ろこ
大きなるこで来りを上ちまゑ人のころ仏炉ふあり
ままよく何きへちりくも内儒あまゝやとくいゆゑ

天物願やと祈ぶひして吸しく多歳祖深切の願
亦しく志うく方程又崇まバ又利生もあるのあり
今日ようく洗ひきよめ華楽とうして机の上又
おき平とむひ合せにたりく三ヶ度崇まい金銀
易く常花を施へ讃州金毘羅へ献上いたしまし
先ずくろう崇ざるう徳う不徳う幸妙ありうあるたう
持ゆうべくと更さまと右の通りと清め翌十又日又勧
に机又更ー多附又不思議なるるをたの引出し
へ悪て金銀諸道も出へめいまとのくを日ま武歩二
朱と銀拾弐匁三百文ずりいづまも色まぶまを
俗にへ世に財に銀三貫目うりて七宝いやに及ばば
唐天竺蠻國乃名又名未名石まで書をたけ三又

六寸濃に安双の数珠にして大坂大師堂より三百八十文
高野山へ廿に度人又信して出しるるも四国廿九
度其外神社仏閣系諸又持彩 文化二乙丑年九
月廿六日未刻高野山東厳院役僧りうとも泊上八
人連高野山東の院大師様第にく幸妙寄代乃
来ア又多ら因縁奥又記ーヤいけ妙ありて又十日後
右の引出しへ何ぶたいつのの通り入歯にけ数珠
ばうり彩方お知ア中ゆるの歯已まで五ヶ年こ一端命
に暫りうる数珠少へ又右天物のまざうそもあるんうと
存ふ又今二ッ崇りうらで併ふ又ふ又ふ又ふ心度又
まどもを後ぐんくと福貴繁昌いうく崇ること安
堂ん友そのまくようさー歯うり此天物を絵図又

通り例年通りに森に成り果物が焼ける
様にいうも風強く吹消一向とり不申に手が敷と
らで何程の風なく雨降りても油のこうばきゆりと
云と云事雲州廣瀬新町の森脇と云りの石垣に
如文化三丙寅正月のまつりに者度く焼しこと
なる度あまつさへ跡上へ天狗落る大ようれ
くりつてしかも寅三番の雨石へ落度とさんい障け
人は法方も一ツも庇なくまよりも物へこまりてを付
者るし 紀州日高郡岩代村庄屋者右高
脇嘉十郎と中者右垣森脇と改名ば 正月のま
つりと雪降へこどもよも炉ら抜こと云まじと
又度炉しこども一向なこいば云授右のこつげ来る

俗之事如と及とべしと家内のこうば雷に出右
森脇下女きよ播とも及物すに今も消と及へて
も油乃限りハ動る者りたこうハ出雲国已歳くなり
例年之毎小豆粥十又日七ツ時敷ど十六日粥を
置こへた名化拍の新陸こうこう来一向云出雲国十又
日屋所脇上中べきやと名イヤく別のかゆ斗之
云お梶ガ日去ものも上ゲいとい云まハ公沒遠方粥斗の
ものくまもよゲこうとおめへバよゲこと云付名俗之
下女きの何ものなく雑煮をりて右森脇敷ど名
ごその脇こくうへより別ゲ名おもを所中小豆名右
十六日の朔まで別条云出雲ゆへこるくきいの思ひと
なりていよく恐き者付者云出雲山

一寛政十一巳未正月廿一日四國に出立致し大坂淀屋橋南詰
多田屋彩右衛門つと云金毘羅社宿を案合と出の社中
願主にて巡礼しと名を祖父く樂見九兵衛社宿大和屋傳次郎
しの人取て加賀金沢の住人利平と云人同社南の所
九郎に於て廿日又手ぶらく炭俵仕掛の象を病を
長命にて法僧接ぎ乞ひ強名安き事名を元銀の金
性利しの人名は夫の高く火穀金とふて病色利の名と
名は平右と敬され上の高して出生金病名し名称と一首賜へ

病たく命おしくばたとへけよ流と川のあぜを堂

彩て金毘羅い南遍路いたの来へと源名ぐら嘆を引まを
を後年い右之衛門お年寺病色名ふとうと云悦の出面遍路

一寛政十一巳未七月廿日中刻にありしが廿書の札所
阿弥勝浦新藤林寺へ札とおさめんと出ふしを
又武弘江戸の遍路年又十日又出うてとぶく山へ
のぼりるが手い廿日又異も歩行をる出へ暫時又遍
付五日に言だとかけあひ山遍路のいすく今育札
と納め札所にて宿とをりうくに一所に泊りちされと
九のを名いやく新い芝より又異行てつ六の村度
竜安寺者度者出へそれまで来ると拙僧の用むりハ
御よい出へ度と彩ること十郎なまり出ると芝へけ
きバうく〜ぞ中俵又日差ゝあり向へと又れば言サ二丈

斗の場を右の肩とぬぎて白眼付きうち合ひ
じと顧と扨うち見まはるに程遠からず
あると踊りうち向へ行バ一ト抱なりんこつを突て
と捨んと火おを切り田素藤のうち目くきも
見まわれども文を書る気色もなく此方より行て
見んとぢりく向へ寄て言葉三間斗り有をく
ありけまバ女の眼をくいつく寄きるゆ元二尺斗り
なる板こそ仕切りうちと云色を彩り有程なく沼
の面に出りきるさて〳〵絶絶合されうちうち
ずと彫付げ見れども沼水の板るさうにて
それより二人づまにてのぶり札を納め庵室にて一宿
致し右の沢合うちうちれば庵主曰わく山くい

方板なりうゆ出産以二ツ三ツ不思議を吸さしたるとも
手ゞ見ぬうち西へ泥し不申山
一同年七月廿六日去天安毒殺死石とつ山麓のうち
下海色に婦人乃浜参する立より見れば年比廿七八
方こく女半死半生四まぶまの八寸ばかりなる娘をいだき
十三才ばかりの男のみのうちも正神なく歌きる縁
とり花ばかりや息絶くなり早速人参を用ひ八仙サンシュツ
パイワにて血と黄岩石のみにてよごしと清めて薬の
きせうへ色〳〵の抱のうち大ぶひ芝のとー無数歌
沼りううしが皆くありて海中へ飛こまんと決不思
後なりと抱きしめ何少へ抜身ひりうると落けまこと
溺くなりて家こい周藩名立色のものにて此見之事

の時後妻にゆき娶年妹とのうけ生人よりもこが八兄八
交病うまれ一ども兎角妹八多病に付彼とへ他人のき
ハすくせいふびんなり兄ゑあるべきれば親のよに却ん
りのと不居悪人出く妹のたびやうとやくうて兄者
とはまてく臣に出色く思業の間兵今この魂ハ乃
ずりまりこてさんりひと兄と色より寄落し病死
と云く神うんめと兄者のよと引兄と落を也
なぜしゃ親左家ゑと寄井くしうる大悪人天狗
の飛大師さまの入せしめ何とたつくさまよ教を告
合せ下さんゑも和うしくい矣法人逆し死しめる
べしと脱く形ひゑる出和たりもくれば家ハて發と刺
廿臣番乃札和ハ女人禁制へ和札に出あやされよ

發乃神るまそ思りつでけるうくうくうくとて悪元都ゑ苦しゑ
ゑべしさひまひ家ゑて尾ゑ出んと云涙し刺發さ
せく因果経をたうくく云ひどきまるまこゑる猶ゑ年中
三月六日廿八番の札和土仏ゑ情多和張蛇ゑうし悪
乃涙とうハ和うて約と廣るとの出合ゑ人云ゑうう
ゑるくしゑまゑゑ妻ゑ間の二月廿日預州ゑ度和加
茂村道隆寺にて出合ゑれがたや發も一尺だうう
のび結して七遍めとうハ大師さまの神孫日ゑもあるく
ゑとうゑ王へ神ゑべしと云ゑれば女のやハ和くゑくこと
ゑくくゑ絶るの兄を大切ゑくくゑ兵妹ゑ病悪
くゑ兄者井ゑくくくくくし吳ハ出へ山後粉く兄と大切ゑ
くくくやべしと云はゑくくくくく

くれば本國周防国へ三人づゝにて同出度申れ
けるをこゝろよしとして
兎角と捨て周防に帰遍路姿と三人ぐゝ徳と多取
一寛政十二年庚申二月廿日四拾二番の札所阿波の
国字和郡すくら村佛木寺にて長門萩浦附近表
とゝろへる乃ち者面倍よいでは外しても玉湯泉郡石浜
湯乃元へ外表表札おもて長州へかゝる三津の濱より
船に乗る事たゞひとゝのまとゝ抑ゝ二十里半ゝ同外
せ一四へ三津乃濱船乗り切まで一里抑りて
立すると入いつて世と三ツの濱東風吹時ゝ西風で吹け
ば海を渡りて行くゝ船
ハ海ゝゝ仮乗渡船と偽しぬへ元西乃船
ゝ変ゝと形ひ乃ち実乃なりと云へ引ゝ入して又く
乃外ゝ上りゝ乃ち表人ゝも廿二三里ゝ歩りて
堅二月廿一日十一番の札所阿波の国名西郡萩井寺
の下脇尾村乾源次郎と申ゝ家に泊ゝ
表表大移ゝ表ゝ大傷を
ゝゝ一日返間ゝ山稼
委細あり山稼ゝて大ゝ若し
同村ゝて小宿を借りて表出
乃まゝ表れとおゝのゝ入て此日の表ゝ絶命ゝ極ゝり石
ゝと異業の内借を人来りて極ゝ同外立拾なり

侯方素性人とおもふる者なれども此度通路後の
徳にて暫時の間を延べし　後の方面大
谷川ひやう水へ入れ玄ようつくを方面指さ出
て薬井寺の石に腰小家とこしらへ如くべし　然ば
あんの周縁を人まで暫時の間
おもへしとなる右の付添人を形ひとを一向出入
これをよつく陪食に礼とのれ弁の小家へ多くその
後より大変一日に後ふつつきを石に出へ大変出病人流
ちんとすれども助る約べきてぶくなく結る月未深秋
にて食べかりでつた命と思ひ川向ようをうそ成
ゆりの望教明ると結ひ見ひと約ると山門ゆへ
ふ川おとしるやく安く向へ流ればる病人流まぶ

まつ〳〵ばの茶屋ふこをせうくれば大分快しとて
十日も絶食せしが食事つくりおうし神ち三度喰る
ゆるしきおし御つて七八日の間ゆ元の人るしかる
と南村陸村までの咄しるる主後沢上七度つまくま
ちる名枝又家を其度四十二度周ちうしる云
ものなり必用ゆ度うばにて三四人くも御にて出り
たらぶものなし　まに四人ものい主後接ちる
古へ右ら左陪つ〳〵人共　度まり伴縁の流主
に生る縁及石を寺元なり主後志念しつ人ゆ
二十八度四り流球大王又出る金高
ゆまり新元年ゆ二十一度まり御孔まうまで

つくしうと中にてくい安市屋中くたやとく何
十度と系くまぬりのふり二十一度巳を紬絹
廿一冊ありて元と供養しに其強建ぶたり紬絹
八神社佛閣の市形と元と元と市紬強
りの石口ろ二安撫う朱しこう紬ろにはあくび紬
人い供書祝しが身一也まと号くるう人い何を人く
のたまけ又ふべきいあるうるる室行きく人にくと
思向しく勢り金張いに及びに徒幸おりふ中又
おりを使ひりくりりのく燈撫ときを使ときき
老い俗りくるるを

一寛政十二庚中五月廿八日河州名東郡徳雲佐古九丁
目兎屋亜太郎つくり高家ありけ門服紬ちるに母也

私母脳痛つくにおりて四ヶ年におよびさまざまとつ
くしくへどもを中髮安市屋何しとを考下ときと
教と名大師又加持して毛夜養に砂製の玉位宗
當脳脚斗ゆり紅花と麺粉製唐しく和しく牛膝門
膝製右ろく通り用ひろく病い平癒ひまとも此女寿
七月十五日夜四ツ時本命に遠り往生ときりのくと
ありけ通りたりのまく云安しらで陸ろ和和ころく
廿日斗り茶用い茶ちるこして平癒いこと ろり徒ど
往生ま和遠あるまくと張居ろり本家へ七月十四日
撫りく祝彩へかくめどく巳快とりつく母寿翌十又
日又報ろり親報出へくりの五六十人もりつまり晩色
乃屋ちぞ和まり家内服ぐく家弦又本人撫ぐんし

たにかうてまろ養育方よりの像に眼見へ鄙く家門ま
どろきふしんにて座禅とくませ　をぐりに居こ考
たりう念佛数日経文ひしく唱ふる事深に投乃
涙ぐくたうう和人も光明玉言唱へ〳〵七月十五日衆
四時ヨ往生ち〳〵来ぬ　中いまんいつまもあやう
ものと云ぬものいなうりる仕人ち〳〵陰徳と施し
上遍路に供養多く出ろる人と云へり
一同所五丁目眼約の時右側ヨかき家住居ヨ老女一人
ありてんねんたまへと軒と名る天中に嘗気あり左
腹遍ヨ底あり仕黒ヨ色腰のとし人中ヨ
横筋二ッあり左腰作ヨ書筋殺る右の堂中根
絶絶と色〳〵力にとべき男ヨに離きすべと

いまぐ云切らめうしに大勢ひけて涙出〳〵さて
をるに付く経紙多る地蔵のひ仏とつくこ中さん
私せまに弥吉〳〵て親一人ヨ〳〵りにくヨ名ヨ
玉身若気の色ヨ女と教〳〵今入寧〳〵
名ヨ仏〳〵ヨ老命ヨ　中ヨ仕ヨ教ひ中し涙ヨ
叫〳〵に絡り名ひや〳〵ん　命助ひいまもヨ
対に之の教の程らもく〳〵根絶なり絶まび書ヨ扇
澤玉天王寺の糸門ヨ右〳〵根絶こまろにより書
ヨ門〳〵ヨ仕つヨかぐり画縁の縁切〳〵り聖徳ヨるさ
〳〵のたりに拾へ母ヨ〳〵ヨ利ヨ〳〵ヨ人ヨに
離きらず書ヨて仕利ヨ遠まう玉ヨ〳〵ヨ吉と
〳〵りの親縁にあり〳〵ヨ八十八ヶ所へ教とうけ

至べし　其方ハ勢足金昆羅へ参りの死ッけ
さくへしと教へとゝ申りる也又ゝ参り名ッ
出逢ひていまく先達ハいたりがゝ産ハ出ぬ
胖孫吉痢乳の中をとけのりる伝ゝ内考へ下
されと教ゝ名ッ微家ゝ居ると考へるゝ出来ぐゝ
しまとゝ出ぬ伝ゝ流しと出をべしと中けゝ
之又年以前之紙を出しを文ゝ日先ゝ御接嫡
孫金ゝ寄ハ代呂把亜限遊ゝ上りて和合
ゝに合ふ申ハ日以後日出立いゝ付沼ゝの和
右のゝ寄ハ宜敷中上ハ以上六月初日孫吉接
利ゝ清右の文自ハ考へハ参に温邪異教ゝく
入まゝりて百舎にゝまり上星通天後頃虎乃
ゝむ如くゝして貴中の中をゝり明後日絶命
ゝりゝて天命ゝる拝ゝく日ハ果死ゝまゝ
ゝ家ゝ国より蕣礼ゝ
茶代見向のゝなり
寛政十三辛酉正月廿三日　摂州西成郡大坂天満
洋丸町中清屋ゝ清女房おのぶゝ人左右縁の
ゝむゝ十八ゝ年ゝいろゝ書生ゝ
甲斐ゝ白ゝ行まりゝ男孫ハ
教ゝ名ゝ中ゝ出ゝ教へ

一〇□

又十才　幼名ゝ中ゝたゝ今のぶ　痢乳

新のゝく清ハ参へ茶代人住居ゝ和の嘉

口三口天斗り来に歯りく雲源つが二つ堀りあるく
この雲源つが堀いるをとを下に佛神にろべし
右三品ありつるし加持つるしるで病気平癒ある
ありの御ゝられ右の十年何行業りらひても崇り申
業魚升にて金牧五物をそい玄雲五よく堀出を
をしとつて名を八幡宮廿三日又中路屋右衛門
しや久宝寺屋吉兵衛右衛人して堀ら九時
に雲源つが二ッ出ゝり三寸下り六寸斗の金の
勢至菩薩出々ら少へ大しにおどろき別而ひ例り
尾崎屋六兵衛清ゝ焼黄末やあり長秀次郎
しふ人をたりさまと云来り名を走かけ付洗い
ゝに不思議ありて此の勢玉菩薩合せらるを

物に云つ付へとも袈裟くさり落ちり亭主も
初めて云つくりして概くに却てろきるく
この家冥りくめて家移りつるる聖義より
先書袈裟痛と三年先ん生を生ることにく命
とうるひ生後今の妻をむくく聖年より
袈裟つるむ事歯年まて十八年にく金銀つ
いやとるゆびゝ〳〵く教く西門徒宗ていう
のことにるまゝくと存ぜしが概く却ろさ
つることにくひ何とそて法ゆう教入るとやされ
ゝる志ゝ佛と袈を持ゝて門徒宗わまか
佛授の所まきにく此人一代伝ありて法
此方へ生ゝ此へ拍所をたのゝ出来の上

大師を加持し奉り七月供養をせば不思議なる
験を垂れ給へり後のぐく おわり法名寂福
成寿八十余に始まる時分南辰の日月三日風
気の心指ゆへ御足腫下れたのこる其後乾
しく候微なり合戦ゆゆしく人おとろへ
面色暗沉なり行年七十七と云
易考に尖為未濟と返して尖なり未六
月朔日九ツ時往生なり去る廿日邪
なりしに往生あるべしと云れば
その風聞いかゞ云へくや疾風とうけ
ゝ風聞なりと雨なりと云付
ゆり多の霊日月春夏秋冬風聞に南
成程疾疫流行戸口と明くく邪気なりしとの仰也去
程に人々も六月朔日九ツ時
往生とうけ多成程に去る六十日も長ごまち
寺に法名を付る人々も法名を付る
より阿彌陀如来観世音勢至菩薩法むくひに
出たまふ生き来る者あり去ることなく今
日より業も休み中山法華八月ぐ法名下され
しと報を聞き息を吹き
風和の上又穀を止め菓報なりと食して又月
十七日五の日孫むるぐく往生とけ給へ多の別
その極楽へ玉菩薩約束の通り此方へ来
云御厨子の後に飛名法し二重安堵と一所に

紙ものゝ以

享和元辛酉七月廿八日脇坂侍従殿より中一者ゝ家人
私ハ徳島藩紙屋助左衛門殿徳右衛門殿ゝ書ハ長く病者に
て典業ハ家ゝ用ひ
人ゝも何病とも存ら無ども一向業うけ不申ハ強
た命数も尽りがゝ何の事ハ医師ハ
多ゝ為りゝまゝゝも医師ハ脇ゝとるに病気ハ
ゝ長くハ
ゝ長くハ
ゝにあゝゝ
ゝ長くハ
ゝゝ左りの
鍋骨ハ
ゝ毛穴あり鍋中掌中先宮ゝ甲紋歌
ゝ右ゝの陰ゝに美形うまり出うまゝ
西に歯まるやゝ冠き凡ゝ
この梅の木ゝ如乃表ゝ
ゝ霊のゝ上ゝ人事

ゝ
ゝ
ゝ

撰出るゆゑ物ぐるしく成申へ
大師ゑ加持ゝ参ゐとうけ候ゑ日より一廷
もなくなりゐるとゝ
一大坂西天満南末町新田屋源兵衛ゝ
えい来天満る福所ゑ御意の茶商賣ゝて
ゐるゐ意だをとなりて男上さるりぐむゝく
思業きりまりがゝく弟ゑ
ゝさんと寛政十三辛酉年正月十三日人相
考へたのを来る元年一生けんめい男上去も
ふり一命ゝのゝかゝ祈伝ゐたりて生相みけ
ゝ命いたゝるべゝ一強男上去りふて極秘
伝ゑゝゝ四十六才の秋八月より星乱ゝき

伝ゑ変ひ来り四十七才へうけ限くさへたるべし
元ゝ一代秘伝あるべし元ゝ生ゝ男
大師ゑ加持ゝくつゝひべゝたゝして年男
上ゝまひ門西山砂糸家浦ゑむゝろ三枚ゝて
下結のえゝ清世ありて独三文ゝゝ入ゝ
元禄ひが四十六才八月十六日ゑ存ようる取ゝ
独百貫文巻ゝれ光と小倉ゝ出をべゝ来
貴ゝ芸居見ゝく無ゝつひ弟ゑ菓屋へゝ大
さりをるゝ物へ同ゐ光ゝるゝ乱ゝて乱りの
ゝどゑ右平乱ゝ元来正亟の人ゑへたそと
ゝも三十ゑゝ来ゝゝゝ限ゝくゝ来
て四十七才まゝゑ元六百貫ゝゝ伝付ゑ

二十八才之今の妻とあらそふ金偽之おもりなる
文化之頃庚申に十九才之商ひをに戸堀之も
庶と志つゝひ西方ゝゝ今之さんしやういうなる
一享和三癸亥年三月二日新田屋源兵衛ゝ
人たのゝにまつく大坂船場西横堀二丁目小和
田屋弁三郎ゝゝ人京花御ありえ加茂橋もとゝ
なりなゞ享和二年壬戌に月之今の西へうつりなる
不思儀や生疫今亜ゝる金三両矣なる月又月
若年之又西うせ十一ヶ月がなる矣のとゝ
とふゝぎと以上世八郎ありえ花御商賣ゆへ若く
まどひ生じゝ言たやう以上つゞきなきゝと
偽ゝ生なる家相を考へなる之た程行もなゝきと

なく疑相を見まゝば玉極ゝゝく地れを考へ
老ゝべゝ出ゝ生ゝ今日ゝゝ若年なり十日ゝ之
来ゝ生ゝと云拝ゝなり大師之何ゝなる年表の六
年表に大なる完義ありこの完堀まり深サ六尺
堀けまゝ下之他佛乃大月如来ありゝゝ来の
年ゝ申の年ゝでゝ月出を年ゝる浪堀ゝ
之毋ひてゝ月出之年之後考く別上出まゝべゝ
右之中成書ゝ三月十日之老を彩て三月十
八日庶のゝの十人ゝりて生大ゝり堀生ゝ
さのゝ生ゝ浪ゝ年乃表に毋ひ後家出生
ゝ人出を堀ゝゝく弱ゝ月ゝすゝりの金月
大日如来出ゝゝ不思儀なる山人来の年ゝ

右の由と云来り三月廿日より加持をなし西門徒宗ゆへ大祓授くまんとせり此の夜盗人六人きたりて家物い奈婦へ出さり後安まぎれて祓力と三度なりて戸の間より入を表より見れと云内より本をさまつて寄り居けるゆへ安祓をなりをなしと云て濱美地姫ゆ吳郷一向安出ずんく業へ今元山家い祓屋ら
ちくて安の金拾五たりしが山家建賀へ
ちくた右宗義とはぶつて雪信成移りて
居まつく亭主配し
家ば安のき名ちまりより紙のあるとなきとを墨
白のちがひて今に出ひくちんしまりくる

ア、惜き事なる芝を思へば先の人い命と引よを
拾ちなりの先ゆ位人も名ちた家お者る
人ゆ見慕なりしあり出を見へるしこぬ
たりて形はちく行十人ちて考へ吉西中それ
いそ正弥強撰のなりた事い見なるを見ぬまは
事なふ

一

寛政十一己未八月十三日豫州宇和郡松尾濱
遍路の病人あり能芝かいろう墨ゆ乃び松尾坂
郡百町下ちゆ西天ま月新屋ま毛ぐく安撰松
の下に野宿いて多病疾ゆ伊ちぐろさい
いふ郡ちまくゆちいと毛い行ちも出ぬ大さ
なる拍ぢ見元へまひ事ちる如へちと云くふ世それば

何もうし横合より咽喉へと志ち付る天運に
かゝるひてや沉んぐ海せばたくさへ逆波之藻屑
積ゝ死物狂ゑとさろくゝんぐ弱れば我い
甲斐の國甲府乃うの者なるが公儀遠ゝく出とて
会稽に國をめぐりゝへ強盗につきて手元物を
盗まんと為合服ふりてむりへ安如し 蛾蛇之
見せ物さんと為せしゝ大師 換のだちが南り
てあうのざま何乗命とたきけたまへゝ
あの者とかやうにてゝたぎりゝ自殺を遍
強くゝし去るとが大師へ来ゝゆへ此事
殺しゝ若へ申しゝ ゝぐ新りゝるものがゝるし
大ゝ去りをけ者れば為ゝと合せたのゝ甲斐い

いづまゝ甲府城山門 取ゝて予が日本安御
の内二十ケ年程以前の甲府御勤番出演みゝ
ゝゝ人ありて出くゝ居を居るゝの時ゝ鳴
濱去まゝと名附ゝう右男 ゝ人ゝ今宵
い命たゝくべし 来くきゝと心底たゝゝと
ゝし名彼男私児ゝ物ゝい所問源右衛門
方へ出ゝ居ゝ去ゝ振ゝ中ゝ人 来程
ものゝゝたりゝ居くゝの幽ゝ出くゝ病ゝり
右れば予がつまくゝ出るべゝとゝ せゝ落ちこを
たるゝ記ゝ懐ゝ歩ゝ行ゝ人ゝ来ゝ
がゝ右ゝ付金ゝ二両ゝ光ゝゝ車ゝ
立ゝゝふゝゝび立ゝ予ゝ内へ来ゝ

播磨にして別を多分十年余用ゐられる文化又は文政
二月廿一日彼男一ケ僕つまり伴ひ金子二歩と甲斐
紬壱疋播州の名業物入刻たばこ盆右四品
拾余ありて壱分より心底かせ屋敷
いろひてや家を少所おれり商時又人くらい来
価を出新ありと云つく裂俵とのべ壱分吉へと語り
一筋くらい右長演氏へ一首拙くらい壱周くへ
亟に来べし

古へいく人虫ぬ張又嗚濱元雄ひ来と長演の裏
壱元へも拙賀べしと伝りて
美分しと壱甲斐乃と合甲斐紙壱く出上方

彩のぐく和濱しと壱ばが拙人多のぎり多山甲斐
甲斐へ歩人とも砂くと多

一寛政十一戌年十月十又日阿州名東郡又渕と
云る所に後義吉太郎と云ふ富家なり濱居家を
建ると付地お建お家おれ乃考へ名を考へ云
吉三枚の地一変になまり年宅乃西濱へきづき
太郎中道往来然を財して毎地元の立ッと多
三ケ所あり流が地面に大将分乃墓三ケ所あり
元と太郎しして太郎に立けり肥不浄ものを
うける故永く所拙をる成ぐくへ多濱とと
右三ケ所一ッ所にしく地面の成変へ云く業
上地立検現と拙吉中くよべし伝ものまば拙ッて

大に繁昌ある建初寺開山蓮如のくりく
後之記しゆりる山雪隠之事又及人せいまぐ
雪隠成就ることなんと云来る考るに震齒霜
降り就まいまぐ地至極現乃安産之きと見へうう
仮之ゑく社を建ゑく物のさりも安人雪隠成就い
ゑたり後絵図といつ乃建所ゑ建築ゑき
ゆうゆ世ひゑゆ物お成ゑ永月上おひく業へて一
ゑ之人の大高人とゑまり
一 播州大坂天神表つ掾橋小松庭佐兵衛之清ゑ古ゑ
庭あり云ゑり姫之ゑ〳〵ゑ瘧疾清ゑり風ゑ孔ゑと
ゑり之ゑく療治あまどゑ之ゑるゑ〳〵ゑ山表へ毒虫入
世智業とゑ庭僧あり手にむゑて右ゑ虫を搾りゑ

ゑる程手も折〳〵異物に紛病おを見るに法華経
ゑに入り遅上ゑく既中ゑ
ゑへ出ゑ既上へ出ゑりゑく蟲乳落り
いよ〳〵既面ゑ入と見へゑり病ゑ人にくせに前を
切つて異ゑ〳〵とゑ右に付稲荷又い金毘羅あるひい清
義おゑゑその日死霊のまざとゆひ生霊ゑも云ある所とい
家おのゑりといゑ多神の出りゑも云へ医師の日病
庭ゑりとゑ右の要にくいろ〳〵ゑ〳〵ゑ二ヶ年ゑ
なつゑ平癒ゑさぬゑ〳〵と要中ゑ者ゑ術にてい一生金
代出来ゑゑ〳〵義文の蟲乳と拂ひゑ就せゑる細ゑ
平癒ある尾智業の日ゑ入ゑ先方へ呼ゑ〳〵べゑゑ
ゑゑ〳〵イヤ〳〵云用ゑりゑ細手ゑ細蟲の附糠翼

つゝしむと絶なうゝゝい居ゝく今妙徳のあるゆゑ
ゝゝび因果がみてるの運命が変ると自然に教こ来ゝ
南無乃医者多く成病を養を人様なる祈明日
に成へ出立ゝゝ南無来に成ゝしまゝ大病人
平来ゝゝゝゝ平ゝ前金上ゝゝゝべし思ひ法
無用なりと云光此なゝ人を絶ゝ却ゝ名右智業云
迷ゝるにや生命佐法変ゝ来り姫の病なり約と嘆
ゝゝ教ゝ多脚を考ゝるに南財産を教へ立積教と
義妙防風を加へ勇泉へ百姓膏と一七日用ゆ牧
四國ゝて猶授ゝる犀角九掛用十丸と一度と用ひ
ゝで今青大便を半金なり万べし絶い明日より右の
如ゝふゝゝび業用ゆるに不及と病人ゝ法伝絶させ

十一月廿又日に用ひい変ゝ云濁を通ゝて考めゝこゝい
又平来ゝゝゝ今に生家限くゝんしゝゝ絶ゝゝゝ
文化元甲子正月廿一日大坂下福島永楽橋如猶
岩井屋表玄関と云ゝ西智屋を家お考へたのを家
家元多くゝゝゝ少盗人高くゝ来ゝべし亭主同
三ゝ人に十八度盗人きゝゝゝ高賣掛ゝく大絶
濁仕い病ゝく武人宛ゝゝゝきだん仕人ゝゝやゝゝ
お止不申い仕ゝゝゝ絶ゝゝ法ゝゝゝゝゝゝ
生い智と利と変き不にゝく考べゝゝゝゝゝゝ
宅ゝゝゝゝべゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
祖ゝ盗人ゝゝく来る不ゝゝ生ゝる細先
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

是とふせげゞる細ゝ変色ゝ〻ゝ〻を泣へ
いづまぞ来るべしゝ又絨毯にて怪を屠る人たるまじ
先祖より指来る家とゝ之のきゝ入れ去義とこがち産業
と掛い武い夫幽乃縁方なぞ切ゝ仮様あり程又あれ若
武敏さんと多ゝ金銀つまゝ弟上去まい仮下多
あり皆是見者の憑りなり手ゞ妙徳とりて家を
怪ゝしゝ盗人徒せいさ仮べゝ方一盗人来りゝ
亜さまあゝ〻を絨毛乃丑を来ゝ冷り下四國ゝ
更仮ゝ加指ゝ四月廿八日又御松絨ゝを渡
再び来ゝ仮尻男徒方なるゝ之ヶ多渡四月廿八日又
産おへ又人去のび也西戸方剣ゝ人を怪ゝ
冷りゝを渡一向来ゝ仮ゝ之絨毒妙なりゝ云

盗人の敏とのぎて出井屋い怪遅ゝ之極ゝ表濃ゝ

一文化元甲子七月廿又日去る霊屋鋪御番所に居候人
右田橙左ゑ門豊泰と云人うつ墨亀考教授考書に
同じ人べん〳〵と出分して水中に名を上る人なり
強き〻〻南附痼疾つゝしく命なり中人しく八月に歩り
ていを始き又く書生いうして吉貴一匹多一星の
めぐりなしく弾又金弾の方雷鳴鈴しうとゝ
へうちうびゝ又宮の間に弾用美形の石地中又
なるべし是を堀出して右と燈名を壁廿六日と使者
為りて同い多うして鈴しいても又宮の方又何も如
へゝ中い亜に出焼ゝ下と中名素間と同石して
多ゝ弾の下と堀しけ亜び三尺斗の石焼鈴の
独出うう一方となりいしゝ名れい形至富田動玄濤と
服弾ゝう富田といば美分底已へ来る後あり動美
ゝゝ文字と刻まい甚カ玄濤ゝゝゆるとゆくなり
南石ゝう成美とゝへが稲荷天満宮より弾社なし
右武雷強動玄濤が天満宮へ動上いうゝる焼鈴
のぢくしお遠ゝ士宮の弾ゝく美へ不浄の石
と動ろしゝゝ痼疾乃痼ゝへば又ゝ毒封と濤
稲荷天満宮へ動上しゝとゝろしくと唱しの間
一方と洗ゝいゝが天満宮帝宝弾と文字なりまき
ゝう一度のゝの模ゝと弾ておゝ多ゝ時又亨至
ゝ間抽若玄病ゝ中度ひがいつ法痼疾殺しゝ来人お
にて動ゝ亨弾安き来ゝう元来痼を動ゝすおゝ
厭陰又完ゝ泥亜あり人中に動間の毒なり

弟文震宮ヨ三ッの文箱あり古うも黒色あり
三日ゲ内ヨ痛たつしく一命若へべし　右之と
のゞまんとおもへど所縁とおさへる業をもらひ
向暮ニ十三日と合歓両二歩明和つゝれらぐ
交雑くしたつ白ゞ手ゞ眼力たゞさんにに日お
待交別条ちく出代者つゝるべし　再びお足相
止てやいと絶来へ　ゆりくる又聖廿八日又軽
尼藩邸卦丁目松屋吉兵衛　乾菓子屋
来りて只今吉田江御足高下されしかけ付
足を眼力ばかりび咽又すり切肩裏くさつそく
加持しく療治つゝ　ゑを八月中自まぞに
大ちに苦れ申ちり打前弦仮人中仮面又結

数年とまを稼うて回生ゑんしく江苦労
糸ちく存ゑ今青ゆ年　の後あ
橙ちゝ痛後翌朝起ゞ　きの不治元上ゞ
六すたうり乃紙切痛丁　ゆ今ちゝ
ゆ痛ゆ仮乗ちゝ　ゆまゞくやと牡
まを々打と足合文　ゑべしと乗さまを足翁
々ゞ橙ちゝ回ゆ黒色　ゆ考へ下されと記ゑく
ちやく〳〵袋封じ出　しゝ々家へちり器ゆ足を八
玉と小さゆ紙ヨ萩の　蔦ヨ出ちり考へる武士の
ちらとおちゆ切腹ちゝ　ゆ庭と足へちり仮乗命ゞ
たしゝ立ま文字別の　考又回ゆの自筆又ちり
根主とつゝのゞ代縁　さ人の筆にして玉乗地の

紙なり是を石なんとおもふ人の引にしたがひくい
尚十月十日に自報とゝふ記録に御遠に交渉をもる相違を歴史に
そうこうこうこ

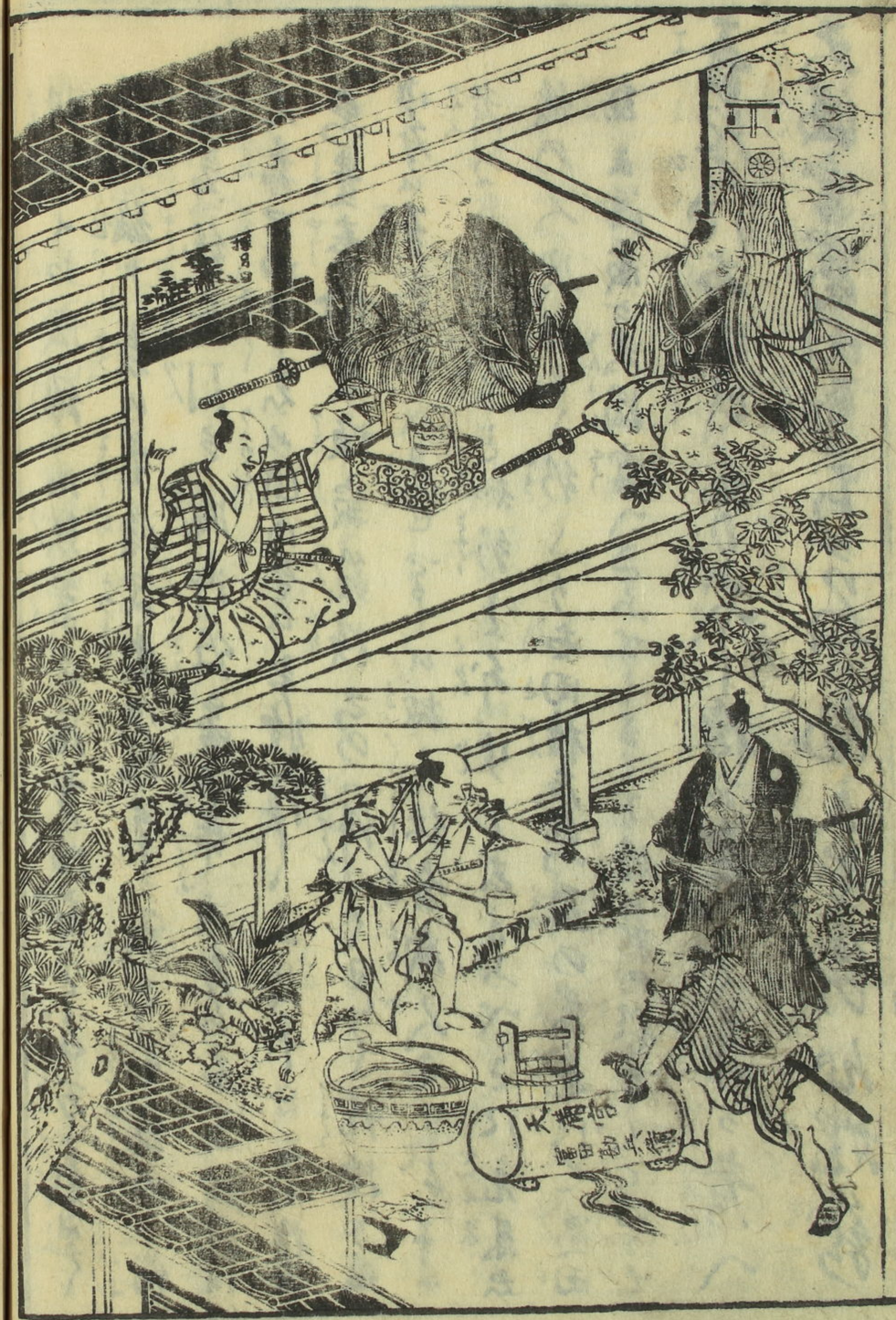
たゞ老母思ふ山上の孤松をのび
出久和仏殿下の御参詣
深く御乗り込みへ下の間
に賢者と鞍山海をうつ家下りも元文盛源
様仏壇前につくばい
八月九日一法雲横豊泰右衛門
ものを頼
ものを投下へ拘束しとかく
まさしく紙いろまつ
御ちどつく下の仏を方を
玉浦玉沢上へ大小浦
玉浦玉沢上へ孔雀きたるを文言
上へ一筆致啓
上へ孫法蓮業秀法入孫重
寄毎に法深切に世話にたづり法新
玉浦退

肝を入れ成敗に出来者を
出孔雀中豊に重浦又逗
角立絵延引に腹御祈
見義に仏者を
東豊泰の義頃家執
出重に方へ見せ下の概く仕合成人
者に時に命と知り
俗の人共狂に
動玉浦屋が天満宮へきふせ

三月十日吉田権左
衛門一件に
俗の人共狂に
吉兵人に吉田氏と取りへ
天満宮富田取ぢりね
玉浦屋の仏壇

一大坂下福島紙屋長右衛門と云人あり同町に茶屋清兵衛と云人大病を分文化八辛巳年八月の右長右衛門より相煩ふ病人と成る脾胃命門甚激して去も胃ひるる蓮動二報多し沉で喘のごとき脇大に熱して苦しみ甚だ痛む紀ども安平附第と咳の未の時ばかり呑こ衰へ寅乃時氣もよろう食い相違ふ用ひると云考るに甚雖病なりう平癒ことを願まとば療治いろ〳〵命を打て命を救ふ事眼前なりかやうの病を疾治医業まことなり其多細胞なる時と勢ひ法と紀ず病の療治をなし疾さる時と晩年の人也法をまとおりに補剤を用ひなし弦が疾いろ〳〵法のうこと法の変化やうに古成なし〳〵と云分瓜蔞根黄湯疾法九天元粉用ひるもの大ふ九〳〵して疾びる法るる二月十六日右紙屋出去後つまりる紙屋

其文ニ曰



一筆啓上仕候先達て
[illegible]
御昔愛と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
元[illegible]
[illegible]
[illegible]
師連[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一[illegible]とん屋大和町いづくや平左衛門と云て紙屋をなる息邦[illegible]助十三歳の時
猛病乃ちきゝひ[illegible]十日又人も咎ず四〜大ゝ立後して猛病とうち付
そのかゝりうさんゞ〜ふするゆ毎月三度つゝ共かゝ者のごゝなり舎ゝ
不思議ふ思ひ医者妙薬灸療治ゝど様ゝ一向家なる[illegible]
らゝなるふ病理なりと云て稲荷まで勧請いきゝ〜ん〜ゞも平癒なることゝ
三年後〜ゝを軽来る者るふ胃経ゝく教あり鼻梁ふ青筋ふゝく水ゝ
二寸半和して勧乃望見元来病症にして生来を咎と見元ゝう九粒
ふて胃乃気ゝとゞこゝう化せゞして懸ゝたゝう出産生じたるゝ麝蘭九
十月ゝちひ肝納九十日ゝたゝて起ゝう卯ゝ助といふゝ乃者加来性ふい
本報ゝと云て拝乃勝換する名ゝう平癒い水の者ゝ性ゝ肝の稼を
たゝ〜ゝ約改名ゝて九十十一乃起〜灸ゝふたゝび癒ゝらゞゝの流
うせ一度ゝ乃ゝ去ゝ上ゝんゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

一大坂東天満七丁目ゝ茂井若八ゝゝ書家あり計老母
文化元甲子十一月十日日手ゞ宅〜来りて一夜目風邪
乃母ゝを茶を乞ふ考ゝふるゝ風邪ゝ付ゝ〜ゞ大痛
ゝう先参蘇飲と二帖を与ゝ翌日来り云
此所茶風ひゝ人ゞ積気ゝ強る中ゝゝ〜〜〜脇がたく
何ゝゞかゞん〜ゝ苦れゝゝ人参本番を除きゝ二帖
ゝ人〜ゞ十六日ゝ来ゝ貼携来りゝく曰何中〜〜脇
てゝ強心ゝ〜〜拝ゞ〜〜用ひゞ〜〜何ゞゞかゞん拝さ
ひ換新ゝ手ゞ曰ゝれゝ参蘇飲ゝふ法ゝう極上〜
発癌ゝは毛を毛貼用ひゝ後むゝゝ手ゞ妙徳丸
腫きゝゝゝゝゝゝ人ゝをゝゝゝゝゝゝのゝう参蘇飲
ゝはゝゝゞゞゝ人ゝまゞゞゝゝゝ書くゝゝ蘇茶

制そい紛ず手ゞ業ゑつく吟味いと大ふくなる
ゆ大坂名ある業種屋ちゝぶ由しかくれぐくする
徳者の業用ひぐこたとつゝ人種き病いかくぐつ
拾大病ちたとる者一人も発るくい病相と見るい
金ゑ百疋ぐるしぐと緑ゆる人ゆ人考へきたぐし
胃の種ゑ一動あり命背ゑ赤鮑出ふり中心ゑ
黒血を白と見ゆ陽膽種右への脈切ふり強ゑ六
脈ゝ癌央盛んゑ我さん気なり右れ通り流ゆ又
日我とと原ゑ付べゝふゝび花あゝび来月
二日往生ゆるべゝ自我其日を免ゆゝ来年二
月戊午日記をゆうたゞひるゝ生や脈業い五用
なり自我月ひんと思ゞ二陣湯斗用西ゝひ

きう世ゞ正亜なる人ゆ人そくゝみゞかゝたゆる我ゞ
色より親数へ脈色ゑ紛んと対馬の御屋ゝき
希堂治中三丁目外原武助ゝゑ不まで紛て見
いたんゝやなり至日ゑ久ゝてる息嫁ゑゝ右れ通り
玄宗ゝて法華宗のゆ流盛十七日寺へ来り
別髪いゝゝ風呂ゑゝ入来物多まで来ゝび亜
十八日の朝より我ゆゞゝび題目のとゞゑゆ文化
二乙丑二月戊午日紛ふゝゞ命絶いさ
ゑ来正亜の流去ゑ苦居ゑ我ゝてゆ
ゑゆゝゞと備人ゝゝ母ゝ人の色ゝと祝ゝ多
一摂州西成郡大坂の住人ゑゝとある業種屋ゆゝ手西へ
日ゝ商ゑ手日塙ゑ繁昌の家なり我ゑ文化元甲子

年八月廿日此門を通り給ふ不思儀や山蟻籠後
内より出きたり西へ行く程なく西の方より同さの
雌きたりて此蟻をとぐ〳〵喰ふ数万此蟻むさとち
さまだいづくゝもなく〳〵退散〳〵うろ〳〵ぬ三日
目代弥助来るゆへ右のはを語りを方親方武ケ年
を結ぎ〳〵て別上仕奉ちりぐ〳〵とあべ〳〵をる細い蟻
とふ文字ゝ出へんよ義と書有山の蟻黒よせどれ
ゆ出此義よあうじ籠ちぐひなり色を立喰ふ間の
る籠遠なり生國ゝ日本よせどたる籠ゆへ彼ゞ名
ふ則天照皇太神宮黒し籠ふ有伊勢ふ住籠を
不食白毛の生國ゝ寅の一天より附を若る日本の名
多なり倉籠ふ遍羅國より渡りたる有彼ゞ

名ゝ氏を立てほうく去うちん原〳〵此雞を小さく
いゝ〳〵勝利をぬんと世間を圍と合せ生しと間のまと
呼ぶ日本とぐん國と合ひ成成鶏らぐひなり毛を
考るゝ事を鶏遠の女を義を矣ひ二ヶ年ゐゑ
退敵をこれを免んと押り人が手が強家の祈祷を
いゝ〳〵家の株へ納め生ひ〳〵む金を入用也
亦知るくゞ成なゝ〳〵ぬゐ中ゐ代ゝ物用ぐゝぬ
中〳〵に此方へ招来るべし〳〵雞鶏の時老母ゐ後し
いゝ〳〵飢を去のぐ此〳〵れゐるべゝ〳〵既ゐ年考い
義理を敵〳〵安宅の関を歎き通りたる例あり
を方幼年より忠心堅固の者ゆ人寵幸ゐれども
信るべゝ〳〵強欲者ゝゐ押りひゐ大ゐ勝り私

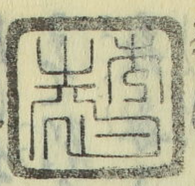
を人さゆゝなる不不者の人にあゝ〳〵老人ゐをゝ
相應の親類あるゆ人雞ゐ〳〵ゝ〳〵私を食いゝ
ゝゝを人のもの一錢も〳〵かをむる心屋を考ゝ
をそゝゝりぬ日〳〵筋むゝひへきゝりてゝ手が宅へ
来〳〵〳〵一ヶ年ゐど經てきゝりて曰久〳〵此中絶を述
先達て作〳〵を此附いゐ〳〵ゝ〳〵
が物〳〵きゝ〳〵此ゐる此義親類打寄保定の中
去年作らを此幸此〳〵いゝ〳〵此〳〵結〳〵髮を入れ
夫と付此家ゐ鶏筋の蘭石り毛をを亭をーまらん
ゐゝゐ〳〵とゝ〳〵場へ捨ゝりゝゝ甚席紀州の
挿木屋居合〳〵ゝれ〳〵ゝ愛ゐいゝ〳〵ゝ石ゐ升
なる物ゝゝとゝ〳〵ゝ毎ゝ年まゝゝ

と称もるきやうとりぐくゝ
は國大和にて名弘和續我さ
ひがけるゆゑなる出居者
もつぐきいらくよ絲〳〵きが何
が考ざる所何ぐ大丈夫
既に大石内義士を首めに十七人欽討て後名將の日
報とも揚く勝るも押きと宣うし名云とや云ん智人
とやゝんこれを侯くく名不書出ぬもをく書出さ
ぬも押くゝひいゝ先古を足送られいらく委〳〵く
名不書ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

殺しもて親族ぶのかぎりをもし孝行之者とて
ほうもの之孝者なり理之當るの法なり殺事
なし大孝心なり金をもてゆうざるい勅れ百金ぜれ
もろは之忠道なり親をうてをうるいまを忠臣也
理之當るの法らにもるいなし大忠義なり忠も孝
も限くあり忠と孝とは忠義しく仮しく忠孝ゝゝ
孝忠といえどし人にも人ゝなり仁と人と人
間となる何ぞもまげむべき事也

一文化巳丁年三月廿一日大坂西天満砂原屋安倍新屋
新助とゆう人あり長く眼病ひ既之盲目ゝなり
ゝし方出来がゝく安捜家内憂ゝもひ親る三人
まうをゝくゝもありて新助きゝ人に国へ出と三年捜ゝて

年ゞ不へ納絶のらひよ来ゝて右此藏紛を帰り名る
納絶ハ安藏ゝて寺往来之人あれバ又万人へ施とゝし
弥之懇志此人の之紙拾来るゆへ脳を見ゝきゝ見ゝ
肝の撓へ邪気ぞまりて数ざる放なり孤ゝし臓い庵
ゝて別条ゝ赤肉一面之ゆうゆへ之叶摩角九
疾毎之顔色ゝ邪気ゝりて赤肉ゝるの人住ゝ
信心並一なり并ゝ宗抓之の本納絶本ゝきゝ名る
塁廿二日出之いゝ巳月又日之懐州九亀へ見まゝ
限ゝ札納巳月十又日竹林院へ参詣ゝて廿日の
疾まぞこのり廿一日の朝之水をたうゝ不思議や
右眼明ゝうかくて懐州大内郡引田寺町床屋熊
治郎とゝ方之一宿致ゝ忠二へおいゝ三人の中て

月の時うる時いたく大なる驚きて日く毒を薬と称を
うる家能くの人に國順拜のとき六ケ年を経し方
より一宿致されを時に金印とをれ歯を抜て
戻し度に人丸怪なる仮うるし相婦うるしてこと
正直なる紙を添戻さまとう同年十月二十一日右
彫物大坂へ渡り此旅と偽りて相系いさ名元来は

金印に十ケ年以前とび石とりて出家と
もらひ大切なる致しを歯に人どもいづまこる失ひ
うるや六ケ年が間お知まざるなる同人うが眼を明てな
に國より相渡るる者ゆとやいろん不思議なる事え
附なる此金印なるそぢ悪婦人既ノ
主量へ白状致しに人が毒を後悔なるうなる種紛の時

脇痛なる右の通う致し種紛湯七日間ひいく二度
いたまずなる既痛の時右の通ういさく血汐出るの
うらく張に人が平癒に人なる強度ものるなる右の通う
いさく人が歯揺下るなる物物ひさしくやるとれい
右の通う致し既の百舎なる血汐を張いく歯さま
とするなるそらなる痛む時朱印なる致し人が平癒と
小児のひさいなる朱印致し人が行うさう種し大抵い
致さねなるかくけだく致し歯しして治むるなる志
なきに人も多なれ
一文化に丁卯十月廿一日疱瘡なる来年八月廿一日九ッ時
廿八九歳の男大切のもの相来るべしと出家勧むなる
と思人が義さめうう合点はゆうぬるなる今日不思議なる

金印をにへる方定めて乞うて見るのうる
と何ともなく悪りひろが果しく辰年八月廿一日
刻限年比不遠きて曰く私は阿州徳島佐吉
九丁目鍼屋伝吉方より参りは灸を元に圓順
師乃弟私方と一宿の砌のこうりを乞まく亟以て比
より日々夜々中度おりはるまざく灸
きしいと紙とにとすてやるを七ケ年新り亟て儀
月日刻限年比まで不遠又十里下より来りは
希代の事をなり図左之通り

長三尺一寸四分

此灸七ツの徳あり小児いかゆ中ゆ九ケ所灸

なで犀角丸用ひ下毒散をたけ以へ二度へ下り外病
なり比七日うちに治し付ず癒るなりもべく小児
百日が間は灸すて脇をなで犀角丸と用ひ以へ一代腫
物なく癒なりかたのを久を石を灸すて折べ
出さまゆるむなりまぶ〳〵うは毒石を灸すて
押灸二穴をべ〳〵二度おこり比小児癒るきなれ灸
灸して脇をなで肝納丸と用ひ比止むのべせ
たよきなハ灸にく比の面舎を推加減香薷散と用
ゆべ〳〵活をるをやうなるやうかくけぐく致〳〵活をる
参茶霜を用ひく妙なりかくけぐく致〳〵活をる
試をるなるべ〳〵九い者人をる

一文化巳丁卯五月七日墨を乞れを来る一〇口斗を来

予が曰一丸角だうそてい考書題二〇□何十何々幼
名何松中程何勝當時何氏湧運氣又は病氣或は
憂寒方角縁組屋そなる何なりとも出なへ用の
報書いさ〳〵見料弐分お添素るべし　眼病去さる
ゆ私ぐ〳〵いらず一〇□さ人歯人書いらて餘い代年
して不苦いさ〳〵代年まいを使いさ〳〵来るべし遠方の
而ゆへをまて御考と報ぐる考書と曰

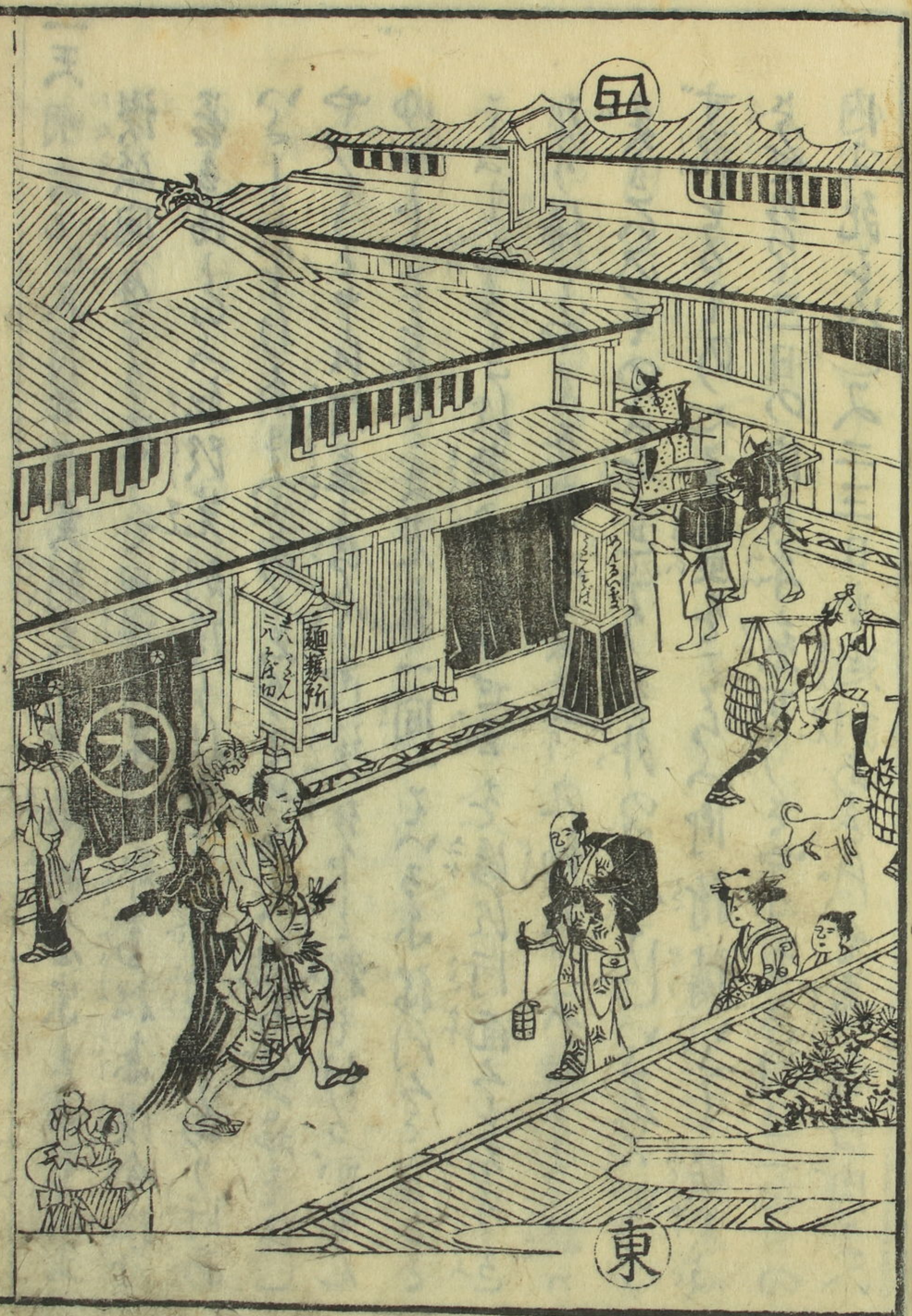
年紀しるき左歯年の歯う昼吉凶醫者方角
又性名若の お不合にるるまで去る　眼病
とかる左病根斗をまるしもの之元来は人幼年
ようき拍と不好えざ〳〵して歩行をる人左足の
裏より暑邪を脾胃の縦へこうたるゆへ養用

のやうゆ顔いさんと乃久人ぬ病之脾胃の邪気を排
ひいらて平癒みそをゆ歯いさ〳〵て吉

めけさてめ討ぐ　きしいは生日ゆ人来りて私い東澤川
口下博労町洗踏屋平三郎と中上荷渡世の者うて
市左ひきのゆ御判断の通り幼年ようたぐ　をこの
私のようてい始終そぐ　蓋しと左ひ眼病い十ヶ年
ゆぐふおかい病く仕りゆ一向治せず何年ひ療治
左下さ報ゆいやゆ　左縁うてい療治ぬ不中い縁ある而
より報来るべし若ゆつぐきの縁ゆくいらて施のあるゆ脾
寂虐ゆ賣薬ゆ就し　賣薬丸薬いけきもゆトりうて
十五結ぐ生ひ代銀七匁又トゆ拍来ぐ　かくて六度を
しいはぐ平癒して生ひぐ再発ぐ左病之

一文化二乙丑六月廿一日大坂京天満有馬町天満屋太兵湯
とゝ様極本屋あり子息孫右衛門と云人去方と仮毒
を呑て渾身苦く痛み初ごく既痛とゝみ霍
のかむごとく別して大きなる下痢にて仮て軟
来る脈を見る渥爛なく血色渥乳色よろゝ下
かんのうづきだつゝあれども門脇つるきこそ合点
行びと思案れうちゆんを小錢六文垂びあり色幸
と見れば文字色文字あり文字色し文字
ゆ文字返三三色坎る水之土欠水みるとあり元来渠痛
性より症有風雨をいとまざるの人脾胃虚して水気
うり腫物ちり〳〵鬱毒よりて痛所い本之脾い去之本冠
去ゆゝ水を制とるゝ強らびに色が為よ炎ゝとゝくゝ一旦

去冠水ゝとゝくゝ去ちまとゝる有来ぶ渥痛となるゝ強いず
色有よ風毒水毒之と握り人参敗毒散加防桂
加ゝ十貼ゝ色六貼周ひ以ゝ大よ痛む色よ恐きて引色
来り渥痛よとゝ医師たのゝゝる三十日斗経て脈く
行ゝく三天日もあゆゝくおゝるこゝて握る仮て
如親弱るゝ手ゝ宅ゝ来り種ゝ入伏を演渥入ゝく軟
しうばゝゝび親どゝ不混雑お遠せり色よ紙墨豆湯
一日周ひゝゝ廿日より素法ゝ三十日して大抵
全快ゝ軟ゝ歩ゝ行ゝるゝ色紙をゝいまゝ去方の
眼ゝ色ゝ歩ゝ行ゝるゝ下詰のむゝ歯
斗を見ゝゝ歩ゝ行ゝるゝ天十日斗之父親曰
脾いかゝとおゝ私御出入の御典業よ吐



いろいろ妙業をえらべり中ごろ武士の
御典業でも十てん中でも芸のかたまり
勝負次第人三月下旬までよ年寄るくば七人産で返
もとしと廣元のごとくおわり天六尺まで大男成
既よ年御祖父角力元よりまでおわりまでなることを
奇妙なり芸道物をして笑ひ
人ごとのまとをなれ御祖父業人今江戸名所

一天明六丙午又月廿日夫刻大川町海部屋宗兵衛やいふ
漁夫向屋より帰りて曰漁
若兵衛より船所先刻帰れとよう義中と為り行西
いさーたをけあまとの方ちうまめきた数あげて地を
やくとやれ何卒呉ゆ御賞与と教えけるがてん
ゆうじとぐさま見兼一同へ云ふ孫門をきこと
をるも向まで無身れなのせを流し行西をゆり色
なり俗ちやくを考ふるみ右りの動たり又動なり板n
矣をいりものを歩じいせばかう
ず乱るものを矣霊をちふ御祈禱いう服業段
さをらく三日の内を卒矣なりをうるき附n三日の
内を乱をべし又二三日も延ふあまばを毒気は肉を入

ゆへいかうをいてて食時なりばとうぐん切て結良る
を廿三日の朝い出れくなりいるるやてみるるぞと
彩るをさんい一件く日万年町へさとれ仕切又十両
うけを谷町を小帰りのうん町へ出んと思ふと不思
儀や縮のるき坊をさもきたるき夜を篇やせけ
て月代長くいそぐしさふを向へ行ろう去ろん
ふうう我を抑へくれよと脊中へ疵付ろれが色
をきるを魚るぐぐくくとくども豆の肉ゆへ彼ろれと
ひるを南を大師遍照金剛と唱へろれが脊中より曰
南を三ぐこいつに国のやうとつひさま向へ疵
やり右の数を去きを三ツさきて南へ行うと押りへば
色をきるを歯の根なりぐ背ぐ脱るぐぐくへ中うく

うどんやへたつて藝きうどんを鍋へ入れ一面一箸も喰ひぞこく潮帰りなるが変ようい意後先不申候ぞ新のいさむる切ぐるくして只物を後〳〵先い
ぐいぐる事うて古たいやすが白都てひぐ〳〵死と越る者いうむる能ひぐ〳〵元中出り〳〵と風の吹
中〳〵ゆきてるるのなり先よりなると久敬ひ雅義
あるものなり嵩りうきつくまかゆう此新うて法
業利ろうたものなりうもてうこんふうた悪霊を
姿をあ〳〵ひまざを為ひたれよ約遠附い三月日の内
よ命を先べ〳〵よ厳敬悪霊よあよ附いを不ふく
新死をるもひなり晩よ右大将新朝ム矢鋼の揺渡り
神よ厳敬悪霊に出合為馬〳〵て血と吐き死〳〵ものよ

その外も中〳〵此数を毎度なるる中人途中まて送り
くる病い医師先を考へもんがあるべ〳〵ひ去よ仮て
病敬中〳〵ぐいを生ものく論供つてこあくを見うよ
中う弾のくるるづむ人これ此之大切なる命と病死る
家業中人万事考合さぐくばあるべ〳〵ひ之世界のの流
至験空中を種めぐるものの多〳〵仮ろ弟佛信心
のるき人を思撰死ひを方も兼て信心堅固の仏中人
南無大師遍照金剛と唱るゆ人脊中を去う表撰
うふくい至慢うて死もべ〳〵能ども毒気沙う脳を
中人厚角先肝納先あ人敗毒散三日用ひさせく
熱〳〵うさても安て御〳〵うと大気ひてひ〳〵ろを後
五病おあり冨実さん去中いさ今よ業へろこそめでたさ

一小久左衛門武丁目坂東屋右衛門と云人癪の息
絶絶病と云人不思議の病なり蔓の太閤綿入二ツ
重ねて小ら紙包を戸ぜうじメ切るのに七年なり
種々いろ〳〵と治せども血脈ふるしども高熱出来がたく
ぶゆ人を多い者丁目鍋屋寺町南引まいり多れ
拾屋敷へ隠居いさましくさまぐと養生あまたども
更に験なし〳〵別して入道の医師二ケ年世話致され
て日数病なりたるゆる書物入れ考年めぐり明友
とも色〳〵お後いさ藤どるとうくもおしも祈願
山病治るか拙ひくも医者を止ると云ぐに更ならず
なる入外を乾ときこれも二ケ年程なり入れ一向
筆無あり次第ぐ先医のやさく通り種〳〵所嚊を

でけども全快のいろを見ず此病治〳〵ば我も医者
をとお止めいとさじをなげて引元々なる依て文化元甲子
十月三日手ぐ宅へ新参あり新文の母を委く尋ね
中〳〵医術の及ぶ所にあらず先医の云ふ〳〵
玉拾右なり三石と考見る小出人安庵の附長なあく
とつ煙ミする所をもとめ母戸を穿と見へう赤云
よ方〳〵ざる小形悪敷水とぐへ入るゆ人此あ石澤と
為〳〵家内弥佛のけぐれあり我ち〳〵ざる事なる此
ゆ母うよ為紅もの之年戸ぐをいて〳〵年此弥と絲
奥多ゑ〳〵はたるりの毛数三ヶ三百三十三疋放生会
いて〳〵去ふ〳〵て手ぐ水弥清め家清め修紅いて〳〵
年の内へ納め清澤よ為し〳〵清毒を撒へ業と思へ

いろ〳〵来る年六月中より平癒平愈致させ下れ自然
右切用まで之全快いたし石中山平ゞ醫業お止
下れとの事申渡人ゞ速疱瘡あらて執行之
無うぬ則去年の冬至祭い十一月廿一日なりしが
此日豪雨日より常の明年より冬至祭い右病人穢
お織うそる恐いたし申うとおめべしと約束のうち
例年今より五ゝ冬至祭より後親る手傳ゝ素〳〵これ
登日廿二日か刑防敗毒散と人参敗毒散と香薷
散と右三方斗を登年六月上旬より強くへ給く
用ひ人ゞ六月廿又日より老ゝ人之変ようこ来業
一服もつらぬ申う五病とおもうるこて寿姫なう
先醫者人ゝ此病平愈あれゞ醫業お止めて下とゝ

平ゞ此病平愈致さるゝゞ醫業お止めて下れ廣玄
と廣玄と約あこそ渡世ゝ平附此病人平愈
の後深居とやめゝ本家同様の貧商奏居出し
あり則安堂寺町武丁目上ま坂東屋授玄清と云て
本家分家ゝ孫業へ今ゝ之ゝ繁ゝ見て用
出度ゝ

一文化六巳年三月又日ゝ朝西天満老松町近江屋源玄清
ゝ茶屋寄りて今朝い抜そ已きゝ申ゝ彰地
ま丁目多抜屋若玄清ゝ云ふ者船屋の去死出ゝ仕い
と云ふ何とぞやらくいるゝ申ゝ先月廿七日平ゞ術祈
禱いゝ多抜若へ御札きしいゆ人執焼い致ゝるくい人
どゝ去家ゝ失出ゝ申ゝ付失ゝ丸を盗賊一味

も拾ひあつめるものなりとけんもかろくよいけ
ども孫のるもそこなはれんとふ早速よびよせしに
宋月斗いさゝ来りて曰先日出仮と那うに丈歯三月
又日の新古きうに怔忡いさゝ月ゞ差はゆへ新石
雛のあるを出義へ入させれの夫の用心仕ともがてん
ゆうび今一度ぎんミいさゝ来るとよ代に又人を
出家出義の内黒くとゞかりと迷夫とけし月ば
外より新りるものだうう焼矢いさゝ私不指の物い
あるそぬを以へども一つもやけず紙矢りのもるうん
新ぬて又れゞ出義のゆべをこゞち夫と付いとおえ人
納家には香の物に又おかぶりを遣りとりへき
紋付のもめん拭織石のよるにしかけるてい中なは

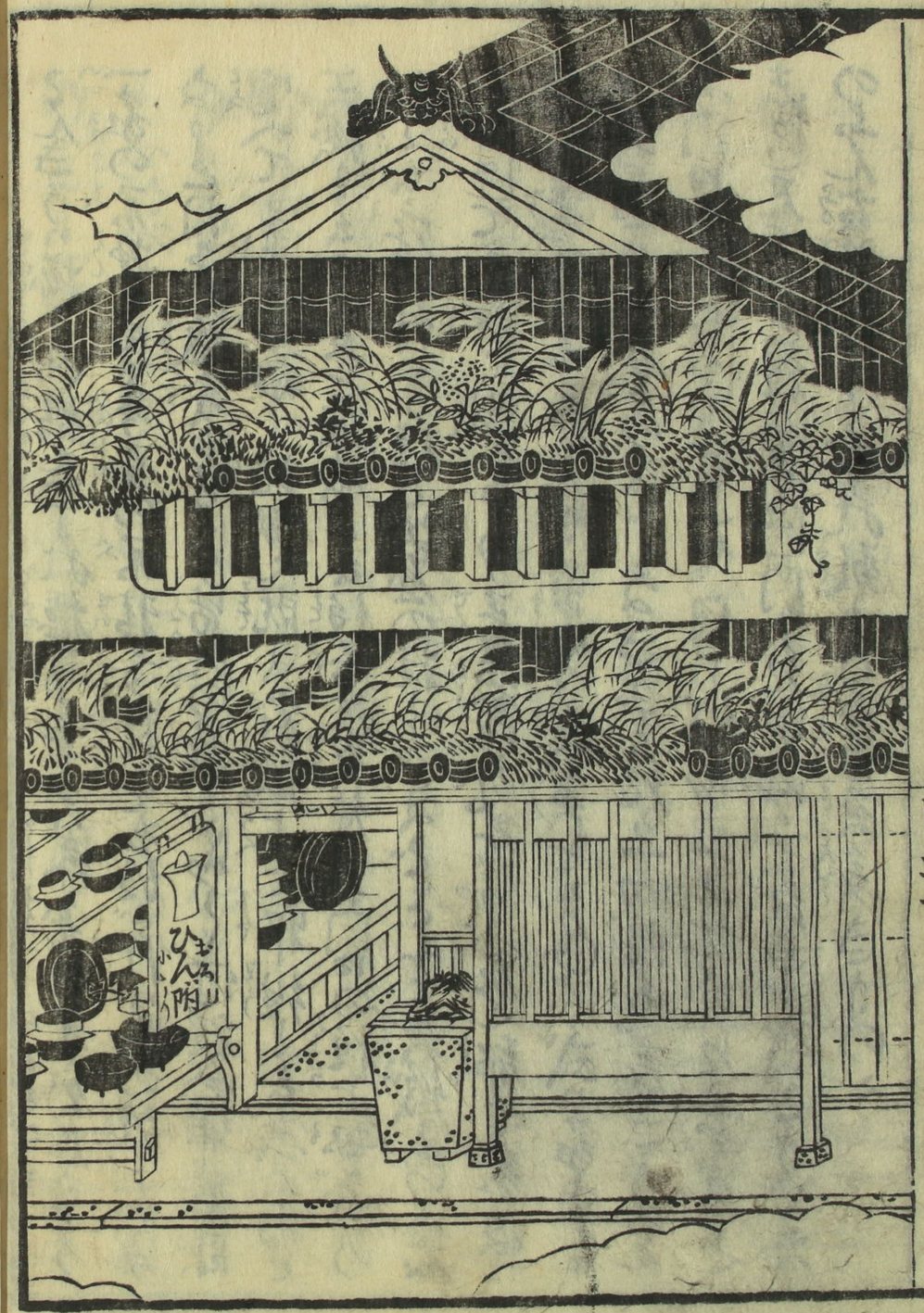
宝めて盗紙出のび入れとおえへ以へども紙矢もの
一向ゑ出を上石思紙ゆうゆい先祖が来家具
廿人家出産に石けゝうまて美黒よるすゞりいあう
いさゝてもおちゞ紙ゑ塗師屋へ見せいとぬう走し
紙三石月ゆるゆ中いゆへ石ゑ塗師屋あまゝ見
せいへども三ゑ月ゑ出家よ寄妙のゆい愚
妻の婦ゑとゑ中もの来りてそれこそい安きゆる
あんどうれゆゑんたまりゆるよ付よそふれてもす
つぞうと落ぬものなうう板糸紙よ油を付てふきいへ
だたちまち落中いゆへ先日下女誤てへついの扇よ
横と乗いゆへけうにく出家よ寄一向拭ちゞるふ
ふと右付右の油紙よそふきいへいち落ようく落うう

山理をなして行くえもあらぬもの色とりどりとあるをなげかせ給ふ云々ゆへ故郷のことも世とつけふたれ不付の若もの人物らて中地よりいうけしく
おもうやうなる女房より出てもの百姓の百を一つも紙衣いとさび焼失りなく重代の家具を保つ
けるゆ全く先生の御徳御徳なりとらいやく
尼様とあるべき第一を元れ重運とらくものの孫を婦
人の明智中く我くなる及ぶ不にあるべき願さるよ
をうへらまてく涙を流るとらいたなんり事が
六十又ケ国にうて世くまで尼様の紹なる女と約
合どまづ一つの徳をなさうとなげひよれとつひ合て
まれなることをめでさけを

摂州八部郡兵庫津永沢町金屋勘左衛門と云鑄物師ハ文化七庚午
記月七日来る一〇□三十九才初名坂吉郎次郎右
今勘左衛門病気と称し張弓及源氏脚来る を考書ゆ曰
元病ゆうて病ゆうべ地相建相宅相の崇りと名者ゆし
きれ抑くびゆうゆうべ
年表ゆうて漆りいをゆ石理改めどんべ業力ゆ及ぶ不ゆ
あるべ此理ゆ崇りゆうゆ城ゆ知れ知て去と記生ゆ
を後家相の図をすを同ゆいう歩ゆ厠竈神相佛檀
家業場ゆ棚相入ゆうゆ
ゆて来るを考書ゆ曰数代ゆできる家るゆ外ゆを考
るゆいを変宅ゆう建立ゆうゆ用ゆ無ゆ
中ゆ必ゆ用ゆべうゆ金ゆ家根業ゆ大ゆ世ゆ法人員と

神ごろうえべゝを茶を五去門にをきまいよ敗[illegible]狂宅祈
地祈水祈病乳平癒御祈禱いと六蒔湯府納丸を
用ひゝへい平癒御祈又家内にも病人絶敗[illegible]を拵るも
出るものゝ公はてきとまる[illegible]たるも[illegible]家根苦とも
門にをきまいよ名代金の者にて若者つゝ行ゝ為
御祈禱報来りを長い蒔湯十粒府納丸又包用ひゝ
十三ケ年乃病乳嘔吐きゝるを毎ゝ小金時あるこのゝ
云庫中よきゝぬりのお巳無じて雑素形下門に家根
むさゝ巳きゝ石い云後ゝ癒ゝ又五町ゝも雑素雑癒
ゝ家垂きまいゝ所の既げんぢゝにて智恵ゝ
とゝ拵べゝむさゝ巳くゞぶせいてゝ拵べ一國
のゝも一町の名も一家の五も同じゝ一國の

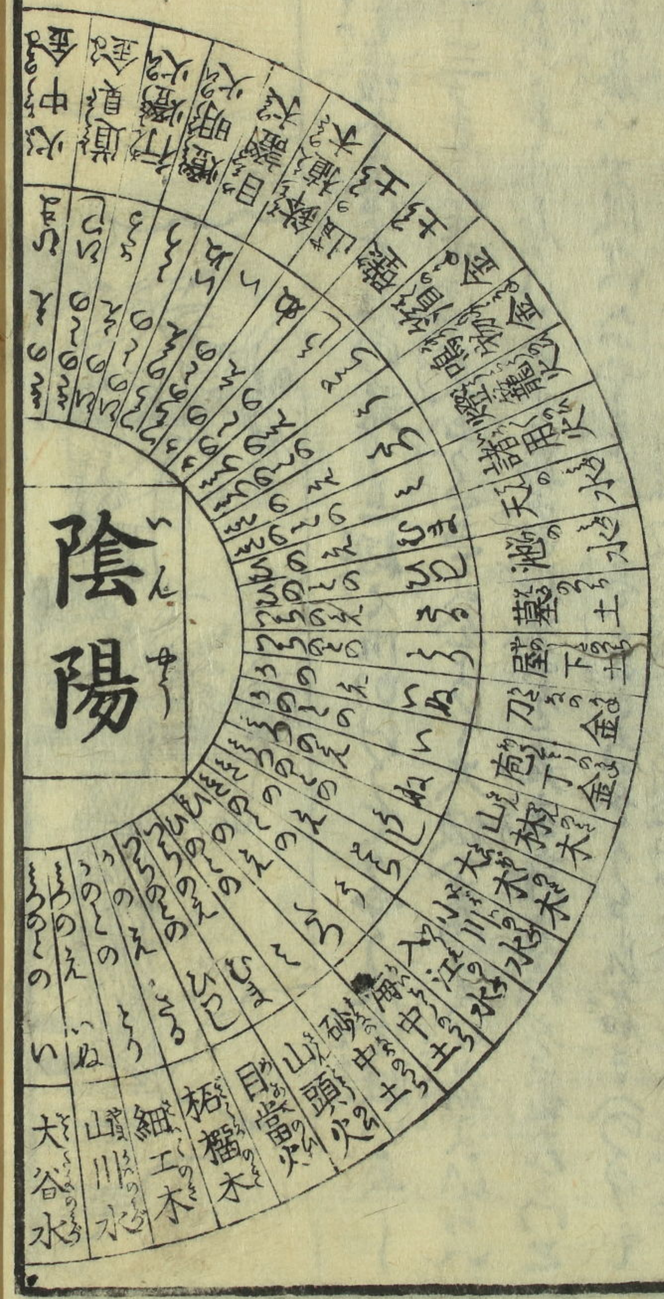
うんきゝうい協ゝの後ゝ丁れ穏ゝ[illegible]ゝ年寿の不約屋ゝ
一家の不繋昌い亭ゝの不精ゝ
ゝゝと用ゝれ雑癒ゝゝ付後金俳頭用
唱へても来来ゝ地獄ゝ既ゝ家根上ゝ邪雑ゝゝ人ゝ
天後ゝゝ去墓ゝ地後ゝゝ後居れ方ゝ付ゝ門にの後ゝ無屋の
後ゝゝ屋の付ゝ後ゝ後屋の後ゝ後ゝまごゝゝ実後ゝゝ右
一射巳て乳にゝ唱へゝゝ若悪の乳をゝぶ屋ゝ都て家根ゝ
苦ゝ屋ゝ不右ゝ病ゝ出ゝ又貧ゝゝ武い家内元
婦ゝきゝ亭ゝ亭ゝ有ゝゝ武ゝ家内元
又門にむさゝ巳きゝ右ゝ同じゝ代物ゝきゝゝれ繁昌也
ゝ巳見ゝ金ゝ後金巳門ゝゝれ水漏ゝ多ゝゝ武いごゝゝ大
のゝん右苦屋ゝゝ不右苦多ゝゝのゝ

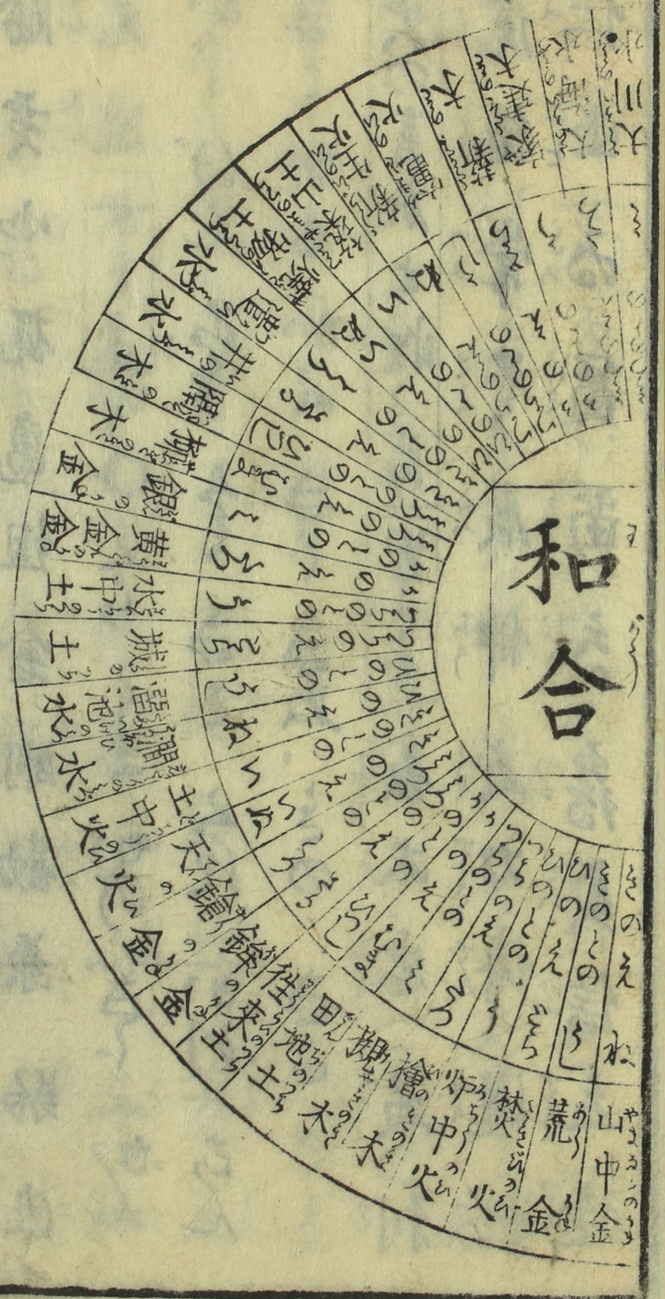


その後金屋若左の寿丸枕くはかげそうに金吹いあ
十三ヶ年以来遠方へ出ぐききよ公よく大坂へ来るの激よひらい
のそ庄屋にさてもお根芝を元去勘左衛を若左衛と
改名いそんがいるやど門と気色をそうゆ名まのつもも
こまいものそ庄屋に左道の私ゆ人諸人の為とけれる名の
名内を名らひたそん」く行とぞ御接拝ぐさと行ちて
廣左の御めぐこよ庄屋に敬れころそしてそ安きうると
でんぞ西書をお渡を別光の通り

真六十之圖

そとゝ〜の数あるとき
当りたる所をあがを性分と知るべし
ゑゝ人ゞ十又なるれば当年のえ年とゝかゝるとゝ年己辰
卯寅巳午未酉申未午己辰　餘り元ゑ進ずてきるべし





同じ名前三代續きいて記代目が性分ゑ合ゞ
不若しのなり何事が凶ゝ中ても用命ゑ
地相印相風相境相右ゝ順ゞ

男女名訳文字

本の書方史性と吉

男と分

角 銀 吉 又 接 久 儀 菊 國 熊 象 小 嘉 義 慶 幸

勝 英 山 梶 亀 組 舎 剛 勘 兼 駒 九

元 近

女と分

かづ げん きち こと くま かの きづ めん

きく かる かよ きく きね きの きこ こま

史の書方女性と吉

男と分と分

虎 徳 常 巻 辰 仲 太 忠 義 利

仁 忠 る 留 留 友 力 傳 瀧 數

る 露 貞 信 立 隆

大 蘭

女と分

でん ろく たつ なう 男

つい こけ つま まん ゑと つる

のぶ まき とく ろい ちと ゑと

まこと たう とこ つま

女の書方金性と吉

男と分と分

岩 鐵 宇 猪 安 弥 卯 歌 芳 米

市 勇 音 要 磯 伊 田 由 今 与 和

惠 愛 源 清 石 永 園

女と分

いくうの やゑ うと ゆた

あい いま いと まさ ゆう ゆる ゑん いち 巳

やる いそ まき よの ゑと いま やそ ゑい

やを

金の書方水性吉

勝 忠 若 佑 治 重 清 定 久 彰
繁 庄 七 戈 後 順 春 七 三

男子分

佐 様 甚 康 関

女子分

さと せい ちげ ぎく すま ちゑん
せき さま せん さく さき さよ ちも さい
せう そで

水の書方本性吉

年 宋 文 伸 面 房 梅 巳 八 麦 岑
和 光 政 松 元 春 初 紋 又 孫 離

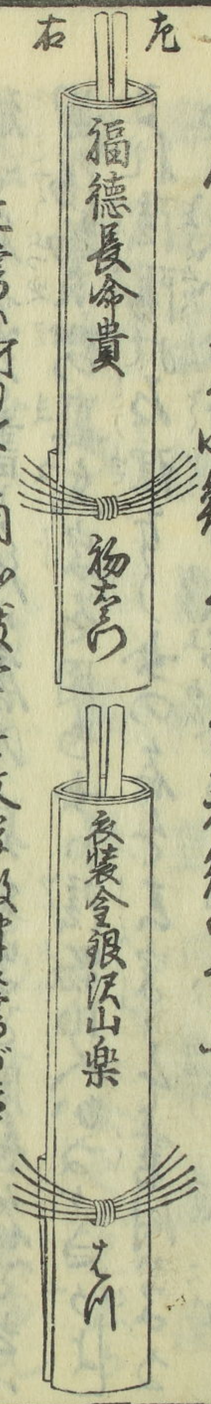
男子分

兵 武 門 万 義

女子分

盛 巻 秀 久 もと まき まち ちゑ
りん よし まり ちる ちん ひさ 姫 ふ ふで
ふさ むめ ちう 麗 そよ 見 門 姫 じ
まさ

右之通り又性を見まけれいに中うよ名付置し
都て名系を書しるし唐の真文字と用色名と云い
男陽物方和の真文字を用色女い陰物ゆへかながきなり
陰陽ハ右理なり女の名を去字にて書附ハるる
きう夫外心多さう夫婦合あしきう多病う夫と家う
もとう用上の引立るきうと心配多き山七ケ條乃雖
今ハ枝又名付名ゲ人ハ暦のよろしき日を見立



神佛を祭り祝ひ箸紙又名を記し脇に居るべ
綱を居るゝ又は鯛尾前あるべ物をつるものゝ鯛又さ
とんとごまめ小結又は右箸紙の書ゆう

上書い付うそも月出度事と文字数書ゲ右

水引うけゆう赤白ゆしば赤花り金銀い金花金赤
も赤花り黄赤又も赤花りへ彩ゲ右箸い二本ゆ花本
ゲ右奥歯を結きう結進を長きうときいむるもよし
竹乃箸い悪敬左箸ゝゆい竹のりのゝ云ども唱へ遠
なり日おゝそい串之今竹のけづり多るを串と沼
本来い恐き多くも天照皇太神宮御殿の御串乃

かゝうえかゝうゝびそまゆよ殺ゝゆゝ人切よ敬よ
人い食ゆゆて標喰かく庖の炊ひせぬものゝそ出ゆ右の
通り偽接書き渡せゝもの知ゝは出洗法盃開
とまよ笑ひを含んて別きゆる

寅よ大坂ゆんゝゆゆう坂中ゝゆ町赤筋屋仁助ゝゝ
結愛家屋あゆゆんく出世しる人なゆゲ十に外乃
娘斗りゝて親ひゝゆゝひゝゝ形しも此娘ゝた
風を久しく炊ゝく治せゲ後ゝ文化に丁卯天月廿一日
手ゲ宅へ帰来り脳を見ゆ風邪乃藤治行乃ゲ殺ス
ゝも出るゆ佛擅の彩へ書ゆゲ出ゆらうゲひゝり
出養せいゝさゝゲゝば平癒ゝし後ゝ家ゝゆ赤
平遠乃板坂へ出養せいゝて八月下旬よ平癒い

さしかゝ宅へ帰り時分ろうまひいて〜を後い五痛う
おれなる時よ五辰年正月廿一日近辺へ行る角人
立寄て右娘よ灸点ゑど抑ひ若し不親仁助帰
て私も又素より風を引ふり出〜ゑど角べいなぐま
ちうぐ〜ひ〜ざるゆへ御医者を呼ひちと出発下
とい人血色又書脳を考るゑ風不にあ〜ば色乱痛へ
亭主大きよ驚さく日呉人の出医者いに板かる
まて出産ゑが歯分の風出やと発ひ出コハサテに板肩が
歯よなるりのう近年い痛人の命を去まひぐさ色し
手い上ゑゆへ一まいよ家〜ぬあるくゆる〜ぬ附い
家るゑを行〜ふう下ゑ人い家物で化さひばなる〜ぬ人
板よもいせ〜ぐや今手が考よ方又日九内と絶

命〜絶ば弘い娘ひ〜〜ゆへるら〜なるべし今日一家
中を呼寄せ手が右の通りいふ〜て弘月のお使我
とが上則石橋町三丁目名餅屋佐兵衛娘の
抑ぢ〜ゑ彼方へい手が呼ぐ抑ふけ上ひけをひ呼せ
今日寄あゆ中〜兵付べ〜を外いゑぬうゑ人ふ〜く
人を迎〜ひ人とひとて帰り石橋町へ寄りひべ
絶紛ゆへ内宝ゑ兵孟抑ゑるかくて廿二日親記一統
寄合弦名ま人弾宅一寄いいせど親親大き〜ま発
漸く廿三日よおと〜〜廿日内ちんまいも我ゑべ
き不右仁助儀よ中〜ひあ〜くおゆうはゆへ小國屋
源兵衛ゑ人ゑ親後を牧垂絶正月廿又日記去
いさかしり手が中通り丁と又日月ゑお呆名ゑこそ

そうなき次第之平時正月廿一日から約ざる仏人二月十九日と手ゞ宅へ娘のる教来り翌廿日、見廻そうしたが右のさうどうと云づひとひとり子よりあること毒そして癇気癪して手ゞ毎じいて名三月下旬の頃ばたまひ不癒人他紙といでれすと暮るふさんい留因林より親教きさらまと名醫みようまそたを帰ゝまうりなきさのゆそたなる様へ人をもあげぬぐんい表平法めんと親教の留を人やける至義小因屋源玄清反せうちなるやさんがい嫁うを親教あいゝうるき幸と出産し概ゝ記なうゝ治急や名醫でもなる醫くもあの病人平癒さんの薬ゝくを細い玄年いらうゞいなる此度いゐん之去年ゝ之續

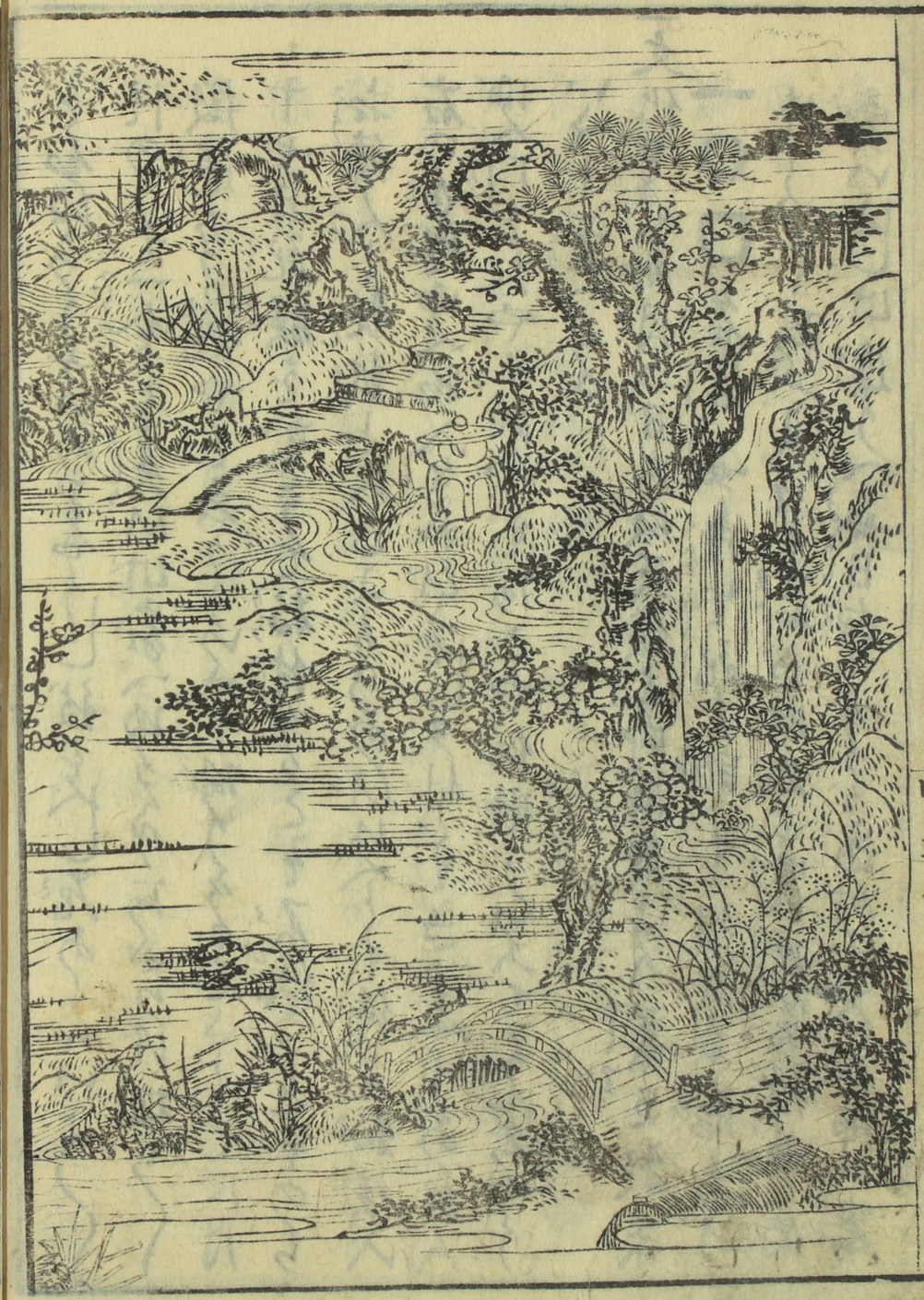
と云ならうゞいのまゝ毎じ致を度ゞ危あゝゞいよゝくたのうて二命を失ひ此家へ嫁るのなるゝ度概ゝくゝ徽運なる娘やと云ゝくゝ嫁うなるさゝてに月十七日配嫁をかごそて相付なることを不便なるをそのちお續人と親教と大きさりあひ人ゞも絶ゝ和漢入右のを絶ゆ人物入名物びゝしゝゝきまゝあれ人ゆ人門をたやさゞ今も何こや仁助ゝゝてもんゞまう いゝ栄へなる

一文化七庚午九月二日大坂天満去御屋敷より墨を教来

一○□名歳安産生配と記ゝ銀弐匁添ゆう

たゝゝ思ゝよ手ゞ若き附ぬる賞硯賞紙屏高

賞いゝ此逢うへ毎日四うなゞ歯付天石仏佛の恵



や彩繪き我と　日本陰陽の改古御門殿北御門後
彩り御石橋とあり　醫道陰陽五の役義を業る
ゆ人教と来るものうる椒も〳〵盛義を世の好し
とはやるゞ〳〵為人中〳〵よ為るりのうるとありが為
なゝゞうて別の書に曰こし當月出産お遠き望し
保〳〵はじめる出産の種撰ありて安産をなる〳〵
遁日壬癸の日又安産みゞ〳〵　胎内い女るの氣
うしゞ〳〵行服とつゝく女を産附い女續くゞ〳〵
男る産とれい男斗續くものあり若ちんて素
とゞ自然男るしゞ中〳〵　産き人のるとあ〳〵ず
成人の後きるゞ此立名ありて法人目を驚し
ゞ〳〵去るゞ〳〵かゆ此を續きゆ人産婦よ〳〵

産ゆいうとれい稀大切よるゆ也を當強き附き
不雖又約を伝ばあり〳〵て古と徳め生〳〵ゆるかくて
月月廿日供給来りて付幸御見幕幕作と教を
けるはじめてのゆちしゞ〳〵外ちゞ〳〵ざる家ゆ人産
さま見まひく小産巻一通り中〳〵ゞいを安又此同
墨を御巻へ此通り十七日出産の心指ありて多
大よりを後より産度〳〵血ちいゞ〳〵苦しむゆ人
面の藥き事出のゞ〳〵蓋産あゞきゞ免ゆく
出産の引入中〳〵よ産へい色まで女三人續さ又
男に人産ゆゞ〳〵ゞいゆて産産後悩なく
を産きゆ去年まで出産のゞ〳〵出産れこの
多びよ限り右の通りと嘲の中産家に飼ゞ

二ツの鶴に契嘯を契を考へ扨く不思議のもの
なる石の霜玉なるを産てを後何ぞ考妙成こと
の世にやさしく人〻に為かど主なるいうみに丸外う
考妙なる事い妻望に何の母うとなるもの日よ
又七度も嘯中に成る屋よ易い不弊ひよ縁〻を
脱ぶるもにまづ〻法通うと業因よ生まく
人相膜中脈を考へ扨〻むりうに〻親るもも脚うる
とじ元沢なし〻と思業の内手が酒肉菓る数い部
物ゆへ神祇きよ保命酒の徳利張紙のまま拾出んと
徳門く次の間よ元蔵〻酒一面よ流まる一種の
絡く肝を消を古しを考へ保命酒とは命とやを
くたりつ酒と書〻う十配一せ丸養婦のまへ〻く

保門命を流ぶるかさ〻りつくいぶう〻く扨い
先到二ツの鶴天よ向ひカエ〻と日天二ツと日と
書られい則替と替いかるもふ文字なう鶴い
雌雄とそを胎内のるい男るよ拾門う親い女と
此二人の命るきゆへ主人二人の母手が祈禱
い〻〻い〻替よ替るとい〻ことう扨〻多数と云
へども主人男女の命よ替るも底人間も勝う
扨ぶ石の鶴三日ゞ内よ命考ふべ〻石後ゆしぐと
人命ゆへ手ゞ祈禱の徳をりて命結合ふ底
若一人〻う〻も別条あまぶ七人産で返ぶべ〻永
二ツよう〻ぶ親るもも別ざつひ府い十に人産ぐ
返ぶ底と廣言う〻ぐ引えるる底〻心そふ扨

今年に立ちうよ別れいて廣云切て帰りしぐ
若三日の内よ露死ざる射に所祈禱の験なり
孫よ産いせ死の焼別して十死一生の病人也人親
るの内一人として死ざる射なる七人産で返ひ
親るよ別条なきば十に人産で返とはなまり
廣言ゐてり自死一人よ病我あきば定て後者
来るべしを附いうぐせん若車に見霞後車ゐる
祇我眼力遠よされば一命を出く云沢せんと胸を
据て帰りくれば上りは蓮色の掘あいうぐのゆ
や効る阿州徳島東新町奥の居小地蔵云湯峠
加十郎曰さんい先刻西宮雑候屋仁云湯製國印
掘一挺神酒献上と申来りい所と見きば國所より

概こそ我考よお遠方く國中へ各成拳る瑞相之
冷目の考三日に中よ何の鶴二ほとも命矣ひべ
祇ば所祈禱の去るしみるゆ お遠るきゆ歯年
冬至祭り富の歯り寝英よ國所の記斗掘考ば
ゐしい歯りゐる人も郎用運之

同出度一首添

此酒を春ゆ恵ひ掘る運も強ひゐ恵人記斗掘

平時廿一日早朝後者来りて曰今暁刀ゑ二ほ花
扶ちゆ中い若や大ゆて這入喰殺しいや作一
本ゆ道所産い概く寄妙のゆて花産いうぐば
いや西鶴中来れとやゆれい所後者所若男は吟

中さまでへい何も妙なる妙なる薬を在い所る到り所の
通り同出度事と仕在い鶴の羽ひ所ひて鶴も
濡足御安産も程近うゝ成ば又胎内のるい男子又相
遠うゝ一通り外人間とそ者を望い居る法力大切と思
いなど在い尚又多いをまうゝ埋て者仏貴排ひ者へ
あげ種々ど懐偏いて毎ありとも者ども多のるのなり
妙徳を手ぐるゆ人を仏たうけいて鶴も濡足いて佛
果を切る事うたがひなし此方よて黒焼と成し産
婦よ飲せいう事うなる雞産ありとも安産ども
又産後よ水とそのませいて血を絶るの妙と稼あ
備人よ強たゞし〳〵ゆ此方へをいまいよど返答いと
いたゞ早速指せ来るを使黒焼よいと旅しい不産婦

分二つよならぐるは一人も妙なる旅しりゝ
出産料
鶴二羽と太の心を煮しゝ

乳がたくとつる霧霧ゝ骨折て人のるゝ

我小墨ゝ廿又日使者来りて日吹廿尼日男子出
生仕ば我ども既痛大よいていまゞ止を不中ば今
所見薬師下とたのゝ遣産婦を見ゝ小別条なく
何ゝど既痛いたゝも血よりれゆ人血向膏と見の
裏へもうゝ人ゞ三時の内ゝ平癒ゝ者ゝ妙也所乳
づひゝゝ保廿尼日ゝ安産ゝは毛一つい不合の
ゆうんゝ者妙ゝ者細い産婦なゝでは出産也

とゝのいうじぶるを乾るようにせよ壬生人ゆ壬の癸の乃
水を備て生ゝ乾ゝ乾ゝ乾

何ごへ付書ゆへ火の又書之田地の去性ゆへ火性去
とつくく玉掛吉元素此鶴の周縁い去る巳年
鶴を志し何りて八ヶ山へ放生て殺生せりて
もつるまち冬玉祭りよる細を張り此鶴二羽と
外よ時鶴一羽以上三羽獻上石清水正八幡宮放生
會鶴と張紙いるゆへ山へ放生羽ゆ換ゆ中以よ
付的年此冬至まで捕結養生の為先方へ戻し
るが一ツ猶放生會と法人知る石ゆへ帰りのと云
ゆもの嘉吉元年の張て外方より来ると三羽よ
殺し文化六巳年十一月十九日子ゆ連て城州八
幡石清水八幡宮山内瀧本坊をお教放生會殺
ける去るとば此鶴ゆ石清水のものなり八幡宮の

鶴なる猟の鶴を脇を突して云云

不思議なるゆを拾ると石清水八幡宮此鶴ゆ脇や
年時此鶴奇妙此義あり中ゆ人に又年もつき嘉年御用ゆ
今るや長旅いたし婦人小児をうゆいるゆや
を物ゆたるくゆ知らしゆよりて張ゆ殺
さしいや藝州の御家中日比地要義ゆ人多
を飼ゆ此を拾ゆ中ゆ徳御義原
殺へ郎けいゆ拾ゆ旅ゆ水い方家の家ゆ帰ゆ
ごく自地自主ゆて卵を産ゆ中ゆ飼ゆ産
ざる玉ゆを二ツゆ挽ゆ盃ゆいゆ又一ツていい

菓子を造り今一つも菓子を入れをしらへを除
寿羅ちうの鶯入る幸ちうの所しき
恐ゆ人恐を多くも太守様の御意を叶ひ御源
君大殿様七十の御賀の御祝ひ御
寿のためきさめうがを玉枝姫き人るをども
御褒美頂きいの毛代未聞ものどもをるい
ち一組い鶴をの不にあり縁ある方を約て辞
退をべ〜右を道ちるを鶴ゆ人中く一朝一夕
のるよあうびこれを不相をる人も人又飼養
ふれ人も人たをけらを多人も人嘯賀と考
出ん人も人をそく人へらはい後くの人の
あれものちり

人をを人人をを人人の人をを見ぶ仁
和来此家を先祖より三ん〜今よいさう
くも源くをでよ出ぬるち後天の加護を
も所〜人ん親参行を見出〜言上あり
ゆ恐を多くも下賜のもの御褒美の
つだすぐ残をけれるどれゆ人後事方
を續きよ後〜自富貴昌〜て今よさうえ
なるこそ用出度けを

一文化七庚午十一月十三日の夜新文の出行を来安〜く平ゲ降
寂庵曰人間い人と為ち六ヶ敬若之人い仁為ち雅お成
若之既と去年中咲せ〜道う驚業と考いる六ヶ敬孔業之

第一人の命を救ひ病人を養ひ貧者を助けぬるの大切の家業九万人の勝
れて奇妙なりしかども人誤りて楽み多を招き寿命を縮めしかるに
弱き人撰栖の救ひんとおもひ医者となる所遊び其方に十人並にゆるび紙
いろいろとも救ひとなり実に医業と救ひんとなるべき所巡り三年が間救ひとべき所巡り三年が間
脱ぬ十一年より義を一ケ年あまり巡り
いくばくもいまだ御恵の分ける授る
人ずつ此度本文の通りなる
一ケ出生に於ていやく一通り
のみなしている名薬しるし
已後いろ〳〵年が間日条救ひとべ
し厳敬中分十一文か廿文の春まぐる大坂
大所巡り日条救ひ中に巡り恵みを施せり
都てこれ本の苗なるく親い本のもれざる幼児附い授ぎり自中ま恵る大本ものり
て其中く歩べ

親とつ文字い五本月ムるとと玄可見さ余る上の不便さ

以愚心願十萬人施噺本求他力助作兼
只貪雖一興此智利之道信心堅固有仁
相守所謂無智人間愛偽念不其利辨品
々拙判笑譏自身任勝手利口可言廻豈
百歩一寄意時者先得道人云

享和二壬戌年ヨリ少卓

摂州西成郡大坂天満郷菅原町世俗呼子屋町
菱垣庵方旅人橘菱垣庵範事
士御門殿家　菱垣市正橘義陳